

市場経済の神話とその変革：〈平等主義的〉 市場の可能性：問題の所在をさぐる

清水, 和巳 / 柴田, 徳太郎 / 佐藤, 隆 / 長原, 豊 / 沖, 公
祐 / SATOH, Takashi / 金子, 裕一郎 / 芳賀, 健一 / SATO,
Yoshikazu / OKI, Kosuke / SHIMIZU, Kazumi / NAGAHARA,
Yutaka / SHIBATA, Tokutaro / KANEKO, Yuichiro /
KASAMATSU, Manabu / HAGA, Kenichi / 野口, 眞 / 浅田, 統
一郎 / NOGUCHI, Makoto / 植村, 博恭 / 笠松, 學 / ASADA,
Toichiro / 佐藤, 良一 / UEMURA, Hiroyasu

(出版者 / Publisher)

法政大学比較経済研究所 / Institute of Comparative Economic Studies, Hosei University

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

比較経済研究所ワーキングペーパー

(巻 / Volume)

95

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

51

(発行年 / Year)

2001-02-16

市場経済の神話とその変革シリーズ No. 3

市場経済の神話とその変革

— 〈平等主義的〉市場の可能性—

問題の所在をさぐる

佐藤 良一 編
「市場経済の神話とその変革」
プロジェクト・メンバー

2001年2月

はじめに

本稿は、座談会、それに対するコメントという形式でのプロジェクト・メンバーによる「協働ワーキング・ペーパー」である。座談会は、昨年12月16日にほぼ3時間にわたっておこなわれた。このペーパーの形式は異色かもしれないが、研究途上にある/中間報告的な結果のレポート、議論を喚起するためのレポートというワーキング・ペーパーとしての本来の機能を果たせると思っている。これを公刊することによって、多くの人たちからコメントが寄せられることを期待している。

Part Iでは、座談会を収録し、Part IIには、コメントをまとめてある。Part IIIに、座談会のために準備された清水・柴田両氏のレジюмеを収めてある。なお、笠松氏には、事前に論点を整理し、レジюмеを準備する時間的余裕がない中で、問題提起を引き受けていただいた。問題提起を担当していただいた清水、柴田、笠松の各氏に、そして、いたずらに《差異》を強調することなく、プロジェクト・メンバーの《協働性》を高めるべく議論を進めていただいた植村、浅田、野口の各氏に、改めて感謝したい。

座談会を始めるにあたっての私の発言にあるように、芳賀・長原両氏と佐藤は、「市場経済の神話とその変革」を主題とした鼎談を『情況』誌上でおこなっている。今回のプロジェクト・メンバーによる座談会は、この鼎談を受けて企画されている。座談会の出席者が、この鼎談で展開された議論を意識しつつ、発言しているのは、こういう事情による。鼎談をおこなった三名のうち、私だけは「司会」の形で座談会に参加しているが、芳賀・長原両氏は、議論に直接には加わずに「傍聴」にまわり、座談会の議論に対して「コメント」する形をとった。また、大学院生メンバーにも、コメントを寄せてもらっている。コメントに対するリプライは、あえてこのペーパーには収めないこととした。最終的な研究報告書の形で果たしたいと考えている。

なおワーキング・ペーパーにまとめるに際しての「編集上のすべての責任」は、佐藤にあることを付記しておきたい。

プロジェクト責任者

佐藤 良一

(2001年2月7日)

【座談会参加者】

佐藤良一	法政大学経済学部
清水和巳	早稲田大学政治経済学部
柴田徳太郎	東京大学経済学部
笠松 學	早稲田大学政治経済学部
植村博恭	名古屋大学経済学部
浅田統一郎	中央大学経済学部
野口 眞	専修大学経済学部

[発言順]

【コメント】

芳賀健一	富山大学経済学部
長原 豊	法政大学経済学部
佐藤 隆	東京大学大学院
沖 公祐	東京大学大学院
金子裕一郎	一橋大学大学院

Part I 座 談 会

【佐藤】今日の座談会の趣旨/プロジェクトとしての位置づけを話しておきたいと思います。芳賀さん、長原さんと僕との鼎談「市場経済の神話とその変革」(『情況』2000年11月号)に続くものとして、今日の座談会を企画しました。

『情況』に掲載された鼎談は、[Ⅰ]研究プロジェクトのモチーフ、[Ⅱ]80年代・90年代のイメージ、[Ⅲ]現代資本主義を見る《メガネ》、[Ⅳ]経済理論のハードコア/展望、と構成されています。ここでは置塩の発想をもつ僕と、宇野の発想をもつ芳賀さんに、宇野にこだわりつつ経済史方法論の「脱構築(?)」を志向する長原さんが話をつなぐ/介入する形で、議論が進行しています。どんな論点が取り上げられているかの詳細は、『情況』をお読みいただきたいと思いますが、鼎談の結びで、他のプロジェクト・メンバーの皆さんとの意見交換が提案されています。

プロジェクトに参加していただいた皆さんは、置塩、宇野以外のさまざまな理論を基礎に理論・実証研究を進めています。僕たちは、もとよりプロジェクトとしての《理論的統一見解》を求めて、協働しているわけではありません。とはいえ、参加メンバーは新古典派批判の立場に立っていると意味で共通していると考えています。同時に理論的に相違があるのも確かです。それぞれが理論的に何をなしえていないか=《空白》を共有し、それが各自の理論構築/現状分析に生かされることがあれば、理論的出自を異にする者が「協働」することの目的は達せられたと言って良いようにも思っています。

そこでこの時期に、各自の理論的関心にもとづいた報告をベースに研究会を開催していくという段階から、《協働性》をさらに高めるため

に「市場経済の神話とその変革」のテーマのもとで議論する場をもちたいと考えたわけです。参加メンバーはそれぞれ力を持っている方々なので、いままでの研究の蓄積もあるし、それぞれの所属する(もしあるとすれば)スクール内での共同研究の蓄積もあると思っています。今回のプロジェクトでは、それぞれが独立しておこなった仕事を単に寄せ集めて1冊の本にすることだけはしたくないと考えています。それだけに終わってしまうのであれば、これだけの能力ある人たちが《協働》する意味がないと信じています。プロジェクト・グループとしての統一性、統一見解を提示するという意味ではないのですが、それぞれの理論的出自を異にしながらも、ある種の共通理解のもとに一つのものをつくり上げていくという意味の統一性/理論的方向性を何とかこのプロジェクトの中から出していきたいと考えています。この点は、きちんと確認しておきたいと思います。今日は、お互いに自分の理論的基礎は大事にしながらも、自由にそれぞれの問題意識をぶつけ合いながら、この「市場経済の神話とその変革」というテーマを基調にして、議論を進めていって欲しいと思っています。

はじめに三人の方に5分くらいで問題提起をしていただきたいと思います。清水さんから始めていただいて、2番目に柴田さん、3番目に笠松さんというふうにお話をいただきます。その後で、今日集まっていた皆さんに1人ずつコメントしていただきたいと思います。コメントが一巡した後は、自由に議論を展開させていくというスタイルにしたいと思います。

では、清水さんからよろしくお願いします。

●問題提起 (1) — 「記述」的理論の復権?—

【清水】今はお互いに影響され合いながら、自分の立場を明確にし、そしてその後何かまとまりというものが出来れば、この比較研プロジェクトの一つの方向性が見えてくるのではないかと考えています。その際にお互いが相手のことをよく理解し、批判して、そのことを通じて自分の考えが変わって、相手の考えが変わって、しかもまとまりが出て来るというのが望ましいと考えています。というところで僕の問題提起を始めます。

まず、「史的システム」という方法を提起しているウォーラステイン (I. Wallerstein) を頭においています。彼は、分析対象として、佐藤・長原がいうところの歴史的存在としての資本主義経済を措定しています。「歴史的存在」という意味は、現代の世界資本主義を、長期の 16 世紀に現れた「ヨーロッパ世界経済」が中核—半周—周辺という階梯構造を形成しながら、拡大進化してきた結果だと認識している、ということです。このような世界資本主義を分析する枠組が、世界経済の構成部分、つまり、各国民経済、(かつての)「東」と「西」、あるいは「南」と「北」等を具体化せず全体的な関係性に関連付ける「世界システム」という枠組です。ウォーラステインの「世界システム」論は、資本主義の歴史性を重視し、かつ、抽象的な分析枠組を提供しているという点で「中間理論」(野口)と重なり合うところがあるかもしれません。

ちょっと話がそれましたが、ウォーラステインにとっては「長期の 16 世紀」にその端を発する「世界システム」というシステムだけが資本主義的なシステムだ、と。そうすると歴史的に 1 回しか存在していないものを分析するにあたって、自然科学的な方法であるとか演繹モデルでの検証

というのは無理があるのではないかということ、彼は長く主張してきました。つまり、「史的システム」という帰納的な記述理論の有効性の強調です(『史的システムとしての資本主義』)。1990年代になって(『脱=社会科学』『アフター・リベラリズム』等)、少しスタンスが変わってきて、(言説=理論のイデオロギー性を自覚するという意味で)深くなってきています。つまり、法則定立と個性記述、事実と価値、ミクロとマクロを二律背反と捉える考え方自体が 19 世紀以来の「リベラリズム」に侵されてはいないか、ということです。ウォーラステインはこの二律背反を自明のものとするイデオロギー=「リベラリズム」を超克しようとし、そこに「史的システム」の方法論的意義をみています。とって、彼は個性記述の有効性を常に強調しているわけではありません。資本主義的システムの生成と終焉は恐らく 1 回性のもので、したがって、生成と終焉に関しては、演繹モデルによる説明・検証という方法は使えないのだけれども、いわば資本主義がある程度安定した蓄積過程に入って、循環的な、あるいは再現されるような、現象が繰り返し起こっているときには、そこから演繹的なモデル形成をしても構わないのではないかということ、ウォーラステインは最近の論文(「科学を追い求める歴史」)で展開しています。

このような考え方以外にも、最近、経済学だけではなく社会科学全般においても、分析方法自体をもう少し見直す方法があるのではないかといわれています。この辺で気になる本というのは、レジュームの 1-③に挙げてあるクリティカル・リアリズムのトニー・ローソン (Tony Lawson) です。彼はたしか、数学的なモデルが経済学にはっきり

言って不要だと *economics & reality* で論じています。もう一冊は、薄い本ですが、ルービンシュタイン (A. Rubinstein) の *Economics and Language* です。社会選択理論は御存じのように真偽が峻別される論理学・集合論に基づいて作られています。それをベースにして、公理、定理、証明ということを手続きがとられる。ルービンシュタインが論じているのは、実際に人間が行っている行動というのは、こういう二価価値的な論理学的原理ではなく、いわば自然言語のような真偽がはっきりしない、虚実の皮膜をいったりきたりしている運動ではないか、ということです。ミクロ経済学は人々の経済的な行動をなんらかの「合理性」にあとづけて説明しますが、そうではなくて、僕らが日常現場で話しているような会話のあり方とかそういう経験的なあり方を考えるべきなのではないかということ、実はルービンシュタインは考えているんです。

もう1つは、物理学や生物学出自の考え方で、複雑系の経済学などをやっている人に影響を与えつつあるというか、面白いところがあるのではないかとされている「内部観測」です。最後に「内部観測」に関して少し話して終わりたいと思います。この「内部観測」の英訳はインターナル・メジャメント (internal measurement) です。これがどういう事態を指しているのかというと、基本的には持続する運動、しかも運動を構成する個々の挙動が論理的に演繹できない、要するに予測不能な運動です。これは僕たちの日常でよくみかけることです。例えば僕たちが人混みの中を歩いている、僕が人にぶつからないように歩くためには、相手がどういうふうに動くかというのをその場で判断しながら (同定しながら)、右に行ってもいいのだけれども左に行ったりしながら、歩いていく。だから、僕が右に行くか、左に行くかはわからない。論理的に非演繹的である。なおか

つ、人混みの中を歩いている場合、それがうまく作動しているときはみんなが人ごみの中でぶつからずに歩いていっている、ひとつのまとまりになっている運動形式ができている。この運動自体をどういうふうに記述するのかといったときに、「内部観測」の話をもち出さなくてはいけないのは、これを単に外部から見て記述されると (「外部記述」)、例えば「清水が人混みの中を歩いている」というふうに記述される。しかし、実際に起こっているのは、清水が相手を同定してそれを判断して右や左に動く、それをまた清水の前にいる人が清水の運動を同定して右や左に動くという、「動きつつある」という現在進行形でしか本当は語れない運動です。これを「外部記述」は、あいつはこういうふうに「動いている」、「動いてしまっている」という現在完了形にしてしまうのです。天文学で、未来の日食を予見するとき (「外部記述」) もうその日食は完了しています。その記述に何ら不都合がないのは、その運動が決定論的な運動だからです。しかし、論理的に非演繹的な行動で、しかも継続していくような運動を記述するには、外部から現在完了形で記述するだけでは不十分だという点が、内部観測論の第一の含意だと思います。あと書いてあることは全部端折ってしまえますけれども、僕らが物事を記述するときに、経済学のモデル分析がそうであるように、大概の場合、外部観測をして、それを外部的に記述してモデルにするわけです。その「外部記述」をベースにして実際の運動を取り戻すにはどうすればいいか、つまり、「外部記述」をどのように「内部記述」に接続させるのかというのが、松野孝一郎さんとか郡司ベギオ-幸夫さんとかの関心になっています。例えば、松野さんなどは生命の起源を遺伝子に還元されない運動の中に見ていこうとしています。

最後になるのですが、なぜ内部観測に関心があ

るかということ、ここにいらっしゃる植村博泰さんや磯谷明德さんの「社会経済システムの制度分析」を、先々週いらした塩沢山典さんが批判する際に、人間の定型的行動や制度の生成を語れない限り、結局、「このままだと新古典派に負けてしまうよ」と言われました。今、新古典派の制度生成の理論で一番、論理的に整合性があるのは進化ゲーム論です。進化ゲーム論によると、「制度」は歴史的な経路を前提にして、個々人の合理的な（制限された意味であっても）選択によって形成されるナッシュ均衡です。この理論に対して、ナッシュ均衡とはとても考えられない制度を実証的に突きつけたり、この理論の政策的含意であるナッシュ均衡からパレート均衡への移行に関して、パレート最適性自体に疑念を呈したりも当然できます（例えば、センやアロウを引きながら）。ただ制度生成をきっちりと論理的に説明している理論が、僕が知っている経済学の中ではこの進化ゲーム論だけなのです。そして、この進化ゲーム論の説明原理を何とかして批判しなくてはいけない。なぜ

かということ進化ゲーム論による説明は、基本的には一般均衡理論と同型だからです。つまり、結果論的なのです。例えば、まず「なぜこの人はこれを消費をするのですか」という問いに対しては「消費することによって満足＝効用が得られるからです」という答えが、次に「なぜそうだとわかるのですか」という問いには「それはこの人がこれを消費しているからです」という答えが帰ってきます。結局堂々巡りになってしまう。これはさっき言った話です。現在進行形で語るべき制度の「生成」が、モデル化されすぎて現在完了形になってしまっている。合理的に行動するとうなるという、一種の決定論的モデルでしかない。だから、そういう意味で運動や生成を捉えるときに新たな仕掛けが必要なのではないか。その一つとして「内部観測」が切り口にならないかというのが僕の話です。僕の問題提起は方法論を中心に、芳賀、長原、佐藤三氏が提出している3つの主題に切り込んでいこうということです。

● 問題提起 (2) — 資本主義・制度・主体 —

【佐藤】次に柴田さん、問題提起をお願いします。

【柴田】それでは、いくつかお話したいと思います。今の清水さんのお話を聞いて、芳賀さん、佐藤さん、長原さんの鼎談の中で出された問題について、私なりの問題意識の中で議論したい。基本的な問題としては、資本主義をどう考えるかということです。今、私が考えていることを整理するとどうということになるかと申しますと、最初に書きましたけれども、資本主義というものが持っているさまざまな問題をまず整理すると、1つはポスト・ケインジアンの人たちを含めていろいろ

と強調されている不安定性の問題があると思います。それと同時に、特に最近アメリカのラディカルな人たちとつきあって感じるのですが、公正、不公正の問題、すなわちフェアであるかないかということがかなり重要な問題になって来ていると思います。その公正の背後には、交渉力の相違というのもあって、その背後には私的所有の問題が存在しているというようなことだと思えます。それから3つ目は今、私たちが問題としている資本主義との関係でいうと、特に資源とか環境問題に対してどういうふうに考えるか、それに

対してかなり資本主義は破壊的な力を発揮しているという問題がありまして、さらにそれは人間的・自然の破壊という、例えば人間の健康の問題であるとか、そういったところに対する大きな危機のようなものが存在していると思います。4番目には、これは特にアメリカの、この前来ていましたディムスキー(G.Dymski)などが言っていたことに触発されたことなのですが、資本主義というのが必ずしも効率的な資源の利用を実現できているかどうかという問題があると思います。

ただし、そこでこれまで行われてきた議論との関係でいうと、例えば2番目から4番目の問題は資本主義に固有の問題とは必ずしもいえなくて、例えば社会主義であれば解決できるというふうに考えることは出来ないと思います。社会主義ならば解決できるという観点をマルクスは持っていたし、ポランニーの議論などもそういう観点がちょっとあって、形式的経済学と実在的経済学という二項対立で物事を考えるところがあります。しかし、資本主義以外のシステムであってもこういう問題は起こりうる問題であると思うのですが、それに対してどういう解決をしていくかという問題がありうると思います。

次に、資本主義の制度ということなのですが、そういった不安定性の問題とか不公正の問題とかいった問題に対して、それを支えるというか、あるいは補完するというか、別の言い方をすれば、資本主義というものと社会との矛盾、あるいは齟齬といったものを補完するようなものとして、制度といいますか、さまざまなルールとか慣習といったようなものが、恐らく形成されてきたというふうに理解しています。したがって資本主義的な原理だけで社会が成立しているわけではなくて、それが制度と結びつく形で資本主義というのは歴史的に形成されてきたし、変化してきたというふうにとらえられると思いますし、その際の制度の

中身についてはそこに書いたようなことがあると思います。それが特に50年代、60年代の資本主義の黄金時代といわれるような時代においては、そこに書きましたようないくつかの制度が資本主義の安定性とか、あるいは不公正の問題については部分的に対処した仕組みとして、成立していたと思うわけです。

それが今、特に70年代以降になりますと、資本主義というものを支えたきた諸制度がさまざまな理由によって不安定化し、資本蓄積と非常に親和的な関係にないような構造に大きく変わってきているというのが、70年代以降の時代ではないかと思っています。それに対するいろいろなアメリカの資本主義を中心とした90年代の対応というの、十分に安定的な仕組みを提供できているかということについては、まだそういう安定的な仕組みができていないというふうには考えられないだろうと。それから、日本の資本主義の問題に目を転じてみましても、特に80年代の後半くらいまでの日本の資本主義を支えてきたような制度というものが、同時にバブル発生を引き起こすような側面を持っていた。そのところで90年代の不況が形成されたということになるので、黄金時代を支えたような仕組みが大きく不安定化したということと、それから日本的な繁栄を支えてきたような仕組みが結びつくことによってバブルの発生を引き起こし、そのことが90年代の大きな不況を引き起こしたというふうに理解をしております。

その中で、90年代の不況というのは、特に従来の仕組みから転換するような新しい自己責任とかいうような観点が、アメリカからグローバリゼーションの中で日本に外圧として入ってくる。そういう問題によってさらに不況を深化するという仕組み自体が90年代に発生していたと思います。したがって、現在私たちは資本主義の安定性ですとか、フェアであるかとか、あるいはそれ以外の

さまざまな問題に対して満足できる制度的枠組みを持っていないというふうに理解しているわけですが、それに対して新しい制度をどうやって構想するかということ考えたときに、そこでいくつかの方向性がありうるだろうと思うわけなのですが、時間がありませんので、大きな論点だけ言います。制度がどうやって形成されるのか、あるいは生成するのか、その主体は何かという問題があります。そこで例えば私の考えている発想は、次のような物です。個人というのはいくつもの組織に所属していて、その組織から規定されると同時に、その組織を支えていく要員になっています。そういう組織的な活動の集合の結果として、例えば労使関係などでいいますと、労働組合と企業経営者との相互関係があると思います。企業経営者の場合にも、例えばコーポレート・ガバナンスというような問題に規定されて自由度は規定されてくるというような仕組み、あるいはそれ以外の社会的な諸勢力の動き方といったものの結果として、制度が生成されてくるだろうと考えております。したがって、全体のプレイヤーをどう考えるかというときには、かなり多様な存在を前提にする必要があると思います。資本と労働というふうな形で抽象的に言いますが、前回の座談会では、資本なのか、労働なのか、あるいは資本と労働と第3のものを見るのかということが議論されていましたが、私は基本的に3つ立てた上でそれを具体的に考えると、かなり多様な存在がありうるわけでありまして、その多様な存在が例えば不正の問題に対して、例えば力を合わせて対抗勢力をつくるというようなことがありうるわけです。ですから、最近の労働力の流動化の問題を考えると、例えばアメリカなどで少し芽が出てきていますが、従来の労働組合と全く違った形でかなり流動化した労働市場を前提とした、新しい対抗運動の可能性、あるいは日本でいいますと、企業別組

合がほとんどリストラに対応できてない問題に対して、もっと広い企業を越えたユニオンというような形での対抗というようなことも考えられますし、あるいは環境問題に対して住民が意義を唱える、あるいはアメリカでラルフ・ネーダーがやったような運動があるわけですが、消費者として資本に対してコントロールしていく運動とか、さまざまな形で資本主義が持っている不安定性とか不公正というさまざまな問題に対抗していこうということが、制度をつくってきたという側面が歴史的にもあるし、今後もありうるだろうと思っております。そういった観点から、制度の生成論とか機能論とか進化という問題を理論的につめると同時に、歴史的な変化をどう説明するのか、あるいは現実の問題でどういう提案なり方向性を指し示していくかということを考えております。

そして、最後にそういう意味でいうと、多少今、興味があるのはアメリカで行われてきたようなリバタリアンとコミュニタリアンの論争でありまして、従来左翼的な人たちはコミュニタリアンの方を共同性というような議論でサポートするような動きがかなりあったように思うのですが、ここではそういう人間の例えば中間組織のようなことを重要視するという見方に対して、やはり人間はかなり多様な組織に参加していて、それは拘束的な組織であったり、あるいはボランティア組織であったり、かなり多様な組織運動がありまして、そういう意味でいうと、リバタリアンとコミュニタリアンの論争をどうやって越えていけばいいのかという形でいいますと、かなり多元的な、この研究会や今日の座談会もそうなのですが、バックグラウンドとか考え方とかいうものがかなり違う人たちが、どうやってコミュニケーションして、相互に刺激し合って、何らかの共通性を思考できるのかと、そういったようなことが今、非常にインターネット時代でいろいろな形でネットワークをつく

りやすい時代になっていますので、そういったところに新しい資本主義というものに対抗していく、あるいは資本主義が持っているさまざまな問題を

コントロールしていくような制度形成の原動力があるのではないかと考えております。

●問題提起 (3)―「神話」の語られ方・時間―

【笠松】 それでは最後になりましたが、植村さんのピンチヒッターで出て来まして、恐らく彼がしゃべる広さ、深さのそれぞれ100分の1くらいで、全体として1万分の1くらいの内容になると思うのですが、とりあえず最初に言いたいことだけ言っておきたいと思います。

まず、プロジェクトのテーマであるところの「市場経済の神話とその変革」ということですから、恐らく「市場経済の神話」というものはどこかで語られているのだということを前提にしていると思うのですが、それがどのレベルで語られているか。1つは広い意味での社会といいますか、一般公衆の間で市場経済に対する神話が語られてるといふふうに捉えることもできますし、もう少し狭くいうと、学問の世界、いわゆる専門家の世界の中で「市場経済の神話」が語られているというようなこともあると思うんです。いずれにしろ、どこかでそういう「神話」が語られていて、それを変革する必要があるのではないかとというのが、たぶんプロジェクトのテーマにあらわされているインプリケーションだと思うのですが、その場合にどういうことを最初に話したらいいのかということで、ほんのちょっとだけ考えてあまり深く考えたわけではないのですが、いわゆるポスト・ケインジアンとかスラッフイアンと呼ばれている人たちがいて、そういう人たちだったらどんなことを考えるのかということをし話してほしいということだと思うのですが、もちろんずっと昔に私が

ポスト・ケインジアンとはこういうものだということ発言をしたら、その場にいた何人かの人たちから、それはあなたのいうポスト・ケインジアンであって云々という、例によってそういう話があったので、あまりポスト・ケインジアンとかスラッフイアンとかという名前については拘泥したくないのですが、恐らく非常に広い意味でポスト・ケインジアンといいますと、ある時期まではケインズ理論を支持している人は全部ポスト・ケインジアンということですから、今のノーベル賞クラスの偉い学者でいえば、サムエルソンとかソローとか、ああいう人までポスト・ケインジアンと呼ばれていたわけです。ですから、そこまで入れると今の正統派とほとんど区別がつかないようなところまで、ポスト・ケインジアンという言い方もできるわけですが、もう少し自分自身がポスト・ケインジアンだといって、ほかの人から差別化しようとしている人たちに言わせると、そういう人たちはポスト・ケインジアンと考えていない。そうすると、そういう人たちがどのような点を正統派の人たちから区別するか。もちろんこれもいろいろな考え方があると思うのですが、割と正統派たちの考え方と共通のレベルに立って差別化しようと思ったら、1つはいわゆる商品に関する特徴というか、普通、希少性定義というのをやるわけです。したがってそこから効率的な配分などの話が出てくるわけですが、その希少性定義というものをあまり重視しない、あるいは

は極端にいうと、それを使わないで議論するところがあるところだと、私は思います。例えば、ケインズ自身も、というまたいろいろ語弊があるのかもしれませんが、そういうふうに読めないところもないわけではない。それから、もう少しはっきりとした言い方をすれば、スラッフアの体系などは希少性定義を全面的に使わなくても価格が決まる。ですから、いくらでも再生産が可能な商品があるというようなことを想定する場合には、希少性定義に基づけば全部商品になってしまうという可能性もあるわけですが、必ずしもそういうわけではない。ですから、希少性の定義、それからそれに通じるような効率性に関する議論というものにどれくらい重きを置くかというところで、ひとつ差別化をしているのかなという感じがしないでもないということです。

それからもう1つは、これもいろいろな言い方ができるとは思いますが、いわゆる「時間の問題」だと思うんです。時間の問題というのは、どういうふうに接近するかということで、これもまたいろいろあるとは思いますが、さっきからずっと話されている歴史というような言葉を使う場合には、何らかの意味で時間というものがイメージ的に考えられているわけですが、それに対して論理的な

分析とか形式的な論理とか、そういうことをいう場合には時間の概念を必ずしも含まなくても議論はできるということです。ですから、経済学の議論の中にそういった2種類の部分があって両方にKだというのが、恐らく非正統派の人たちのもう1つの考え方だと思うんです。

あとは細かい論点になってしまうので、とりあえず思いついたという語弊がありますが、その辺りのことが恐らくポスト・ケインジアンとかスラッフイアンという人たちが経済学の議論をする場合に含めてもいいのではないかと考えている論点だというふうに思います。とりあえずそのくらいです。

【清水】スラッフイアンやポスト・ケインジアンの時間というのはどっちの時間ですか。論理的な時間ですか。

【笠松】ですから、別の時間で議論してもいいのではないかというふうに、私らは考えていますけれども、それももちろんどっただけというふうに、考え方としてはもちろんいわゆる論理的な時間ではない方だというふうになるとは思いますけれども、そこまで限定しなくてもいいのではないかと、ちょっと思いますけれども。

● 不安定性・分配・公平

【佐藤】あらかじめお願いしてあった三名の方にそれぞれの観点から問題を提起していただきました。お三人の提起された論点すべてにわたって、コメントすることは必ずしも必要ないかと思しますので、お聞きになっていた方々は自分の立場から適当に取捨選択して、さらに話を広げていただきたいと思います。まず、1回ずつ発言のチャン

スを持っていただいて、その後全体としてフリー・ディスカッションにしたいと思います。よろしいでしょうか。では、植村さんからお願いします。

【植村】今、三人の方から非常に丁寧な御説明をいただきまして、うまく与えられたバトンを受け取って、次の方に渡せるかどうか心もとないので

すが、これから申し上げたいのは、先ほど柴田さんが資本主義の抱えている諸問題というところで指摘された不安定性や不公正という問題です。いかえれば、いかに資本主義的な市場システムを安定的なものにするか、いかにその不公正な側面をよりフェアなものに変えるか、あるいはより平等主義的なものにするか、という問題を考えてみたいと思います。これは、先ほどの笠松さんのお話の後を受ける議論になるかとも思っているわけです。資本主義の市場システムを安定的で平等なものにするために、政治経済学が現在持っている理論的なツールにはいったいどのようなものがあるのか、少し整理してみる必要があるだろうと思います。分配の平等、不平等、あるいは公正、不公正というものを、理論としても、あるいは現実的な領域でも、きちんと言えるように、私たちの理論を鍛えていくことが必要なのではないかと思っているわけです。

先ほど、笠松さんがおっしゃっていたように、経済学には「分配の問題」に関して大きく2つの立場があります。1つは、新古典派の考えで、稀少な資源の配分を問題とする。それも、完全競争的な市場で資源配分が行われることによって、「ハレート効率的な均衡」が実現するという考えです。もう1つは、笠松さんがおっしゃいましたスラッファなどの古典派を継承する考えです。こちらの方は、経済を再生産可能なシステムとして捉える。また、資本そのものも再生産可能で自己増殖するものとして把握する、といったかたちで「再生産システムとしての資本主義」を分析するわけです。このような考えは、大きくいうと「剰余アプローチ(surplus approach)」といわれるものだと思います。私はこの「剰余アプローチ」を政治経済学としては、やはり発展的に再定義していく必要があるだろうと思っています。例えば、「剰余アプローチ」の中で最も私たちになじみ深い理論とし

ては、佐藤さんがご説明なさっていた置塩、森嶋の「マルクスの基本定理」というものがあります。利潤率が正であることと剰余価値率が正であることは数学的に同値であり、ここから資本主義における「搾取」の問題が論じられてきたわけです。しかし、この定理は、資本主義の搾取的性格を批判する基本的なものの見方を示すうえでは、とてもシャープなものですが、理論としてはあまり使い勝手のいい定理ではありません。具体的には、すでに批判があるように、資本を労働以外の本源的生産要素に還元しても同様な議論が成り立ちます。それ以上に問題なのは、この定理がミクロの分配問題あるいは個人間分配の問題に関して、特にその平等、不平等、公正、不公正といったことについて十分に言及できないことだと思います。

「利潤」という範疇の不当性、問題性を告発することはできても、それ以上のことができないのです。そういう意味では、「剰余アプローチ」を重視しつつも「マルクスの基本定理」よりも先に進んでいかなければならないと痛感しています。

そのことを考えるために、少し新古典派理論の問題点を検討してみたいと思います。問題の中心は、やはり先ほどの稀少資源の最適配分なのですが、完全競争市場を前提にすると生産要素に対する完全分配が達成され限界生産力説が成り立つ。すべての生産要素に対して、その限界生産力に等しい実質要素所得が与えられる世界が成立するわけで、それはある意味で新古典派にとっては「フェアな世界」だということになります。しかし、私たちとしては、やはり資本主義というものは個人がすべてのタイプの生産要素を持ってフェアに競争している世界とは到底言い難いわけです。かつてスティーヴン・マーグリンが「ボスたちは何をしているか」という有名な論文で主張したかったのは、まさにこの点だっただろうと思います。企業というのは独自の主体であり、しかも個々の

家計や個人の「選好」には還元できない権力的な主体として存在している。資本主義はそもそもの出発点において、きわめて権力的な性格を持っていることを認識する必要があります。

このようなことをふまえたうえで、平等主義的なシステムを実現するために、いったいどのような分析ツールがあるかは非常に難しいのですが、私どもの『社会経済システムの制度分析』の中では、S. ポールズとH. ギンダスの議論を少し膨らませて議論を展開しています。まず第1に、マクロ・レベルの所得分配については、ケインズ左派的な政策の可能性があります。これは異なる貯蓄率を仮定するカルドア型貯蓄関数に基づくものです。この異なる貯蓄率の読み方も実は難しい問題で、それを資本家と労働者という階級間のものとして読むのか、企業と家計というかたちで主体の違いとして読むのか、という少し複雑な問題もありますが、いずれにしても貯蓄率の格差を前提にした場合には、賃金の上昇や所得の平等化が同時に有効需要の拡大をもたらすという、広い意味での「賃金主導型成長 (wage-led growth)」が可能になる局面が生じるわけです。ここには、マクロの所得分配の平等性に関わる1つの対抗軸があります。ただし、経済のグローバル化が進むと、なかなかこのような論理が働きにくくなっていくのも事実です。

第2に、これはポールズ・ギンダスが最近非常に強調している点ですが、ミクロ・レベルでの資産分配なり、企業組織の所有形態に関して、平等性をより高める余地があるという問題です。資本が生産をコントロールしているときにはモニタリング・コストが高くつくが、これに対して労働者が何らかのかたちでコントロールする方がモニタリング・コストが小さくなる、という主張です。このように、企業がより効率的にワークするように資産を平等主義的に再分配する可能性がある

彼らは主張するわけで、あるいはこういったことが可能であるかもしれません。

第3に、より社会的な観点、いかえれば社会経済システム全体の再生産の観点から考えますと、先ほどの柴田さんのご説明の中にも出てきましたけれども、労使関係を安定化させる様々なルールや制度といったものや、社会保障制度の整備は、長期的に安心して働き、技能水準を高め、そして安心して育児や介護といった世代の社会的再生産を行うことを可能にするわけで、それは資本主義の長期的な安定に寄与するものであらうと思います。

ただし、難しいのは、以上の3つとも成長率が高くなる、あるいはシステムがより効率的になる、あるいは安定化するということが前提条件となっていることです。けれども、はたして効率性を高めより高い成長を実現することでより平等な分配を実現するということがつねに可能か、あるいは好ましいことなのか。そこに議論を集約していいのか、ちょっと留保せざるを得ないだろうと思っています。環境問題などを考えると、安定成長ないしゼロ成長という可能性も視野に納めなければなりません。

ミクロ・レベルの分配問題について言いますと、賃金格差というような具体的な問題をとっても、まだ今のような政治経済学のツールでは実は十分に分析できないということも、同時に言わなければならぬと思います。賃金格差に関しては、ご承知のように、職種が異なったり、経験年数や勤続年数が違うということを経営者側でコントロールすると、どこまでが平等か不平等かといったことがつねに議論されます。新古典派的な論理では、先ほどの限界生産力説に基づく「人的資本」とともに、仕事の困難な方が賃金が高いという「均等化差異」というものがあり、完全競争のもとで、これらに応じて支払われれば、フェアなものであると考

えられています。しかし、どのような技能形成のチャンスがあったのか、職業の選択肢はどのようなものであったのかと考えると、このように単純なものではないことがわかります。女性労働者に関しては、特にそうです。そうしますと、賃金格差とか賃金の公正さといったものも、当てる「物差し」によってかなり違って来るわけで、例えば政治経済学としてどのような「物差し」が作れるのかということは、かなり重要な課題だろうと思います。もちろん、「物差し」の問題ではなくて、より歴史的で社会的な観点から個人間分配の平等性の問題を考える必要もあるだろうと思っています。例えば、J. ローマーの『階級と搾取の一般理論』でも、新古典派のモデルと同様に「初期賦存」ということが、モデルにおける階級分化と所得分配の同時均衡を大きく規定していますが、政

治経済学の歴史的観点からすれば、個人がもつ諸資源の「初期賦存」自体を疑ってかかる必要があるわけです。現時点で諸個人が持っている資産と技能、さらには社会階層それ自体も、長い歴史のなかで形成されてきたものです。したがって、資産格差、教育へのアクセス可能性、所得格差といったものが、どのように相互に影響しあいながら生み出され、また遺産や教育制度や文化を通して再生産されるのか。このようなことも、考えていかなければならないでしょう。このような社会階層の形成と再生産のプロセスを分析し、歴史過程の内部に立ちつつ、どうしたら社会を平等主義的なものに誘導できるのか、このような壮大な話も実はやらないといけないのではないかと思います。

●理論の評価基準

【浅田】清水さん、柴田さん、笠松さんの報告を受けてから、植村さんからコメントをもらいました。それぞれ全然共通点がないと思いますが、「市場経済の神話とその変革—（平等主義的）市場の可能性—」というのがテーマなのですが、私も含めてそれぞれの考えていることがばらばらということなのですけれども、例えば清水さんの場合、非常に哲学的あるいは思弁的な議論、柴田さんの場合は割と実践的な政策論的な議論、植村さんの場合はどちらかという実践や政策の方を重視されている、笠松さんの場合も割と日本的な発想なんですけれども、それぞれがどうもうまく結びつかない。そこにちょっともどかしさを感じるわけです。例えば柴田さんの話などは、私にとって非常にわかりやすいわけです。資本主義の抱えてい

る諸問題、不安定性、不公正、効率性、その他があって、それをいかに解決するかが、経済学の本来の目的であると。もちろん昔であれば、社会主義になればうまくいくということを書いて済ませていられたけれども、今はそうではないということ踏まえた上で、どうしたらいいかということを考えるというのがわかりやすいわけです。ポスト・ケインジアンにしろ、あるいはほかの誰かにしろ、何らかの形でこういう実践的な問題の解決に役立つ限りにおいて理論の意味があると、私も思うのですが、そういう立場が非常にわかりやすい。

例えば、清水さんの理論の場合、経済学の本来の目的はそういう実践的なものであるかどうかということあまり関係ないお話です。例えば、あ

る学派、新古典派という学派に対抗しなければいけないというのだけれども、どうして対抗しなければいけないのかと思うんです。対抗する必要はないと思うんです。例えば、マルクス理論というのは一定の目的に添って重要な論点を批判していると思いますけれども、対抗しなければいけないということを前提にして議論してなくて、恐らく今言ったような実践的な問題の解釈あるいは解決にとって、ある特定の正統派といわれる理論であっても、何かしら得ることがあれば利用すればいいと思うんです。特に、新古典派と呼ばれている理論は、ある意味では対抗する理論に欠けているものを持っているわけです。それはどういうことかということ、ある例えば政策とかある経済的な意志決定は、望ましいのか望ましくないのかということ判断する基準をある一定の理由で示せるわけです。つまり、効用ということなんです。

効用というのは個々人の効用であってもいいし、ソーシャル・ウェルフェア(social welfare)であってもいいのですけれども、そういう政策の結果、望ましい、望ましくないという判断基準をある意味で提供しているのですけれども、例えば新古典派に対して対抗するポスト・ケインジアン、マル

クス派も含めて、例えばウェルフェア(welfare)とか効用とかいうものを理論分析の軸にすることを拒否してしまうと、実はなぜ不安定性よりも安定性が望ましいのか、不公正より公正が望ましいのか、それを判断する基準を提供できないわけです。最近日本の中でも一部の人のによって吹聴されている理論によると、むしろ平等より不平等の方が望ましいなどと議論する人もいます。つまり、日本社会はあまりにも平等主義的であったので活力がなくなると、むしろ不平等を意識的に作り出すことによって成長率を高めていかなければいけないという議論もあるわけですから、あるいは不安定性こそ資本主義の活力の源泉だという議論もあるわけですから、不安定性より安定性の方が望ましい、不公正よりは公正、不平等よりは平等が望ましい、と私自身もそう思うのですが、そのことを積極的に示すためには何らかの多くの人々が納得できるような評価基準を示してやらなければいけない。その評価基準というのは、正統派の言葉でいうと効用ということになってしまうわけです。ある意味で社会全体の満足度が高いか低いかにということに帰結しますから。そのようなことも考えています。

● 市場メカニズムの捉え方

【野口】先ほど遅れて座談会に参加したものですから、皆さんの議論のなかから推論できる限りで、どの辺に話題の繋がり、あるいは接点を見つけ出したらよいのかと、考えあぐねつつ発言を聞いていました。今回の座談会のメイン・テーマがどこにあるのかが、まだはっきりわかっていないのですが、恐らく経済学の方法といいますか、市場メカニズムを捉えるための方法ということに、議論

の1つの重要なポイントがあるような気がしました。そこで、その点に絞って、これからの議論の展開のきっかけになればと思いつつ発言いたします。

市場メカニズムを捉えるうえにおいて重要なことは、歴史をどのようにして理論的に把握するかという点にあるのだと思うのです。歴史と構造との関係は、実はそう単純ではなく、両者のあい

だには統合的な理解を阻むような、対象そのものの性格に根ざす論理的次元の差異が伏在しており、なかなか捉えにくい問題をはらんでいます。しかし、構造転換の運動としてみることでできる歴史過程は、あるときには一定の構造を維持しながら、だが同時にその構造の内部から絶えず構造の歴史的転換につながる因子を不断に生み出していくというような過程として理解可能だろうと思います。歴史過程における、そのような発生のダイナミズムを、どのようにして理論が捉えることができるのかは、それは、歴史学の課題であるというよりも、むしろ社会科学、とりわけその担い手としての経済学の中心的な課題でなければならないのではないかと、私は考えています。先ほど、経済学方法論の批判をとおして新古典派に対抗することにどのような意義があるのかという問題が浅田さんから出されましたが、私はその問題とのかかわりで言いますと、方法の問題はやはり大きな課題になるのではないかと考えています。遅れて来ましたが、私には、途中の議論から推し測るしかありませんが、おそらく笠松さんは、スラフフィアンが説く再生産アプローチと新古典派の希少性アプローチという二つのアプローチの差異についての議論をなされたように見受けられました。そのような方法論的な論議をも含めまして、皆さんの議論のなかで、私が若干親近感を持ったのは、一見すると思弁的と思われる清水さんの問題提起であります。そこには、私にとって受け止めるべき論点の提示があったように思えます。

清水さんが紹介している松野氏の内部観測論が経済学の方法論にとって画期的意義をもつのかどうか、それについての結論を私はここでは留保しますが、清水さんの問題提起において大事な点は、記述という手法を経済学は究極的には採用せざるをえないということ、またそれは、歴史を解明する経済学の方法がもつ宿命的制約である

ということ、そのことが事実上指摘されている点にあるのではないかと思うのです。では経済学は、数学的なモデル抜きで、記述的手法に終始すべきなのかということ、そのように断定はできない難しさがあります。数学的モデルにおいては、命題が成り立つための前提を明確にするという利点があります。極端にいうと数学的モデルは、立てられた前提のなかにすでにある結論が隠伏的に含まれている、つまりモデルの入口にはすでに出口が含まれているわけです。はっきり言ってしまえば、前提を明確にし、その前提に含まれている含意を展開することによって、前提条件からだけでは見えなかった結論を可視化し、発見する、そこに数学的手法の有用性があるのだと思います。明示化された前提がおのずと結論を導くことになるわけです。しかし、経済学の問題は主張しようとする命題の前提条件を明確にすることだけにあるわけではありません。ある命題の前提がいったい、なにゆえに、どのようにして成り立つのかということまで考えないと、はっきりいって経済学の問題にはならないと私は思うのです。だからといってモデル分析が全く意味がないのかということ、私は、主張しようとする経済学的命題の論理的前提を明確にするという点に大きな意味があると思っています。そこで問題の核心は、理論モデルによる分析と歴史過程の解明とをどのように結びつけるのが望ましいのかという課題に深く関わってくるわけです。例えば変化を解明するためのいろいろな数学手法がありますけれども、それだけでは歴史の変化の重要な側面を適切に捉えることはできません。ですからそこに、記述的理論と数理的なモデル分析とを結びつける鍵が潜んでいるのではないかと私は考えるわけです。

そういうふうを考えるならば、数理的なモデルを、それが新古典派的であるのか反新古典派的であるのかにかかわらず、時空を超えて広く適用し

うる理論モデルであるかのように直ちにみなすことには、大きな落とし穴が潜んでいるということになります。そのような予断で市場システムの構造あるいは運動の分析をおこなえば、構造転換を引き起こす歴史的側面が見失われ、かえって視野狭窄に陥ってしまうことになるはずですが、私がついて私は、歴史分析をおこなう理論がもつ適用範囲、その時間的・空間的範囲を、理論の前提条件の抽象度に即して明確にしておかなければならないと、考えているわけです。資本主義市場経済全体に通じる前提条件、歴史的・地域的にかなり限られた特性をもつ資本主義経済システムに独自の前提条件、その違いを明確にすべきであって、とりわけ後者のように適用の時間的・空間的範囲に強い限定性をもつ理論はミドル・レンジ (middle-range) の理論であることを自覚すべきだと常日頃唱えているのです。もちろん、理論モデルが適用できる時間的・空間的範囲は、そのモデルの性格によってかなり異なります。まさにそのことに自覚的であるのかどうか、それこそが理論を歴史分析に活かそうとする際に陥りやすい落とし穴を避けよう道であろうと思われまます。新古典派の大きな誤りは、とりわけその点に関して無自覚なところにあるといえるのではないのでしょうか。そのように考えるならば、記述的な説明は、数理的なモデルの前提条件がどのような歴史的条件を反映したものであるのか、歴史的条件の変化が如何なる新たな条件の仮定を理論モデルに要請することになるのか、さらには、そうした変化はなぜ、いかにして生じたのか、そうした問題、それらは数理的モデルだけでは論じきれない問題ですが、それらを闡明するところにこそ、その中心的な課題を有するのだと思います。記述的説明と数理的なモデル分析とは、一般には相互に独立しておこなわれる傾向が強いために、この2つをうまく連結させていくのは容易なことではありません。

しかし、これからは、その2つがともに手を携えて進むような方向を探っていかなないと、政治経済学の未来は決して明るいとはいえないでしょう。それが、まず私の言いたいことの第1点です。

もうかなり長くなってしまいましたが、もう1点だけ付け加えさせていただきます。理論モデルのもつ時間的・空間的限定性をこれまで強調してきたわけですが、それと同時に資本主義経済が本来的に持っている基礎的な原理が、ミドルレンジの理論のうちにもまったく解消されてしまうとみるのも、また一面的であると、私は考えております。資本主義の原理もまた、資本主義の全歴史のなかで捉え返されねばならないと思うのです。資本主義の構造なり運動なりの共通性には、私は2つの側面があると思います。まず、あらゆる地域、すべての個々人に共通に加わる圧力、構造的圧力というべきものが、資本主義の歴史過程におけるひとつの時代の共通性としてあると思うのです。それから、清水さんの報告では常に歴史は一回性のものであると言われていたわけですが、しかし資本主義の歴史は、一回性ととも、ある意味では繰り返す一面をも持ち合わせているのではないのでしょうか。その繰り返す一面を持たなければ、資本主義はシステムとして成立しようがないわけです。ですから、繰り返しつつも一回性を持っている、そういう非常に複雑な側面を持った資本主義の歴史性をどう捉えていくかという点に、方法問題のもうひとつの焦点が据えられるべきだと思われまます。その際、時代的共通性は異なる次元の一般性という、もうひとつの共通性の側面への理論的志向を私たちはなおざりにしてはならないでしょう。つまり、資本主義の構造転換をつかみ取る理論は、常にミドルレンジのだけれども、同時に資本主義のもつ構造と運動の一般性への理論的配慮をも忘れない、という綱渡りを常に自覚してやっていかなければならないの

ではないかという気がしております。この問題を具体的にどのように考えたらかよいのかを論じるのは、長くなりますので、ここではやめますが、

そのようなことまでをも視野に入れて方法問題を考えるべきであるということだけを指摘しておきます。

● 資本主義と「市場」

【佐藤】では、これからのフリー・ディスカッションの進行役を清水さんをお願いしたいと思います。あとはよろしく。

【清水】フリーディスカッションに移りたいと思います。今、野口さんが最後に入って来られて、まとめというか、いろいろなところに視角を開いていただいたのですが、ここはひとつその辺りを踏まえておいて、このプロジェクトの題名である

「市場経済の神話とその変革—（平等主義的）市場の可能性—」というところにもう1回戻ってみたいと思います。そこから議論がはずれても結構なのですけれども。というのは、今、参加者の方の話を聞いていたときに、資本主義というのは不安定だという話が出ました。仮に資本主義を「市場」に還元できるとすれば、ミクロレベルでは、資本主義の不安定性を本来的に「市場」の不安定性に見出したりする試みが、例えば日本だと岩井克人氏などがもう20年くらい前に「不均衡動学」でやったりとか、マクロなどではもっと古く、ハロッド＝ドーマーやカルドアが不均衡累積過程を論じています。したがって、資本主義を「市場」に還元してしまった場合の不安定性に関しては、ある程度理論的なコンセンサスがあると思うのですが、一方、実際に歴史の中で生き残ってきた資本主義というのが実はあるわけです。すると、資本主義を語るにあたって、「市場」（の不安定）だけを強調するわけには行かないだろう、と。そうしたときに、なぜ私たちはこのプロジェクトを

「資本主義経済の神話とその変革」ではなくて、「市場」という単語を使ってこのプロジェクトを始めたのか（この用語にインプリシットにコミットしている人もいるし、イクスプリシットにコミットしている人もいると思うのですけれども）。つまり、資本主義経済の中でどのように「市場」を考えるのかについて、できれば参加者皆さんに伺いたいのです。

柴田さん、どうでしょうか。資本主義における「市場」というのをどう考えるか。

【柴田】今、清水さんから言われた問題に絡めて少しお話をしたいと思います。市場の不安定性の問題と資本主義の不安定性の問題が2つあると思うのですけれども、いろいろな問題がありますが、例えば歴史の中での資本主義ということではいいますと、資本主義の歴史の中で資本主義自身は生き残ってきたといえます。ただ、その際に資本主義というものの自身は生き残ったけれども、先ほどお話ししてきたような資本主義を支える制度というものを考えたときに、資本主義のあり方、あるいは資本主義社会のあり方というのは、歴史の中で縦の多様性があると同時に横においても多様性をもっているというようなことがあります。さきほど野口さんが言われたように横の関係もやはり時代の共通性というものを考えることができますので、時代の中でひとつのまとまりというものを持ちうるかと思うのですが、そのひとつの枠組みみたいなものが危機に陥るといったことは何回かあつ

たわけです。

私などが主に研究してきた大恐慌のような事が起こる仕組みというのは、資本主義を支えている諸制度そのものがかなり崩壊してしまうというような部分、資本主義そのものは生き残ったけれども、例えば金本位制とか、その当時のアメリカの金融制度などがほとんど崩壊寸前というか、金本位制自体が崩れてしまったのですが、そういうようなことがありました。したがって非常に構造的に安定している時期と構造的に不安定な時期との交代で、資本主義は歴史的に変わってきたと。こういう観点は、SSA 的なアプローチというのとは僕は非常に親和性というか、近い考え方を持っていますし、あるいは段階論的な見方と関係していると思うのです。

そこで野口さんが言われた理論との関係でいうと、やはり資本主義の一般理論を考えたときに、資本主義的な原理そのものにおいて完結するわけではなくて、資本主義が持っているさまざまな通貨が安定しているとか、何らかの信頼が投資家にも消費者にもなければうまくいかないという、信頼とか安定とか期待とかいったものに対する一定のそれを支えるような仕組みがどこかにないと、資本主義はうまく形成できないという意味でいいますと、理論の中でもやはり経済原論などを考えたときに、経済的なロジックだけで自己完結しないというところにおもしろいところがあって、したがってそれが制度と資本蓄積というふうなことで、それがうまくいくときとうまくいかないときの状況というのがありうるだろうと思うんです。そのときの変化をどういうふうに捉えるか。例えば、安定しているときの構造はひとつのモデル化して説くことができるだろうと思いますし、そういうことは非常に重要な点だろうと思います。しかし、うまくいかなくなっていくときの崩れ方とか、あるいはいろいろな試行錯誤をしながら制

度をつくっていくときのあり方というようなものが、外側から眺めてこうやったらうまくいくよとか、あるいはケインズ的な観点でいうと、ケインズといってもこれはアメリカン・ケインジアンだという言い方になるのかもしれませんが、外から眺めていかにうまく有効需要を管理するかということによって、例えば 50 年代、60 年代が支えられたわけではない。むしろそういう不安定性と不公正というのは恐らく重なってくると思うのです。例えば 30 年代的な状況でいうと、不安定性と不公正、不効率が恐らく重なってしまった時期だと思うのですが、その中で例えば交渉力が非常に弱いような労働者であるとか、あるいは農民といったところが、一緒になって対抗していくと、安定と公正を保障するような制度、方法体系ができてくると、そういうようなことがあって、その結果として、他にいろいろな要因が働きますので、そういう力だけで安定化していったわけではないでしょうけれども、そういう対抗運動が形成されることによって、それが非常に重要な要因となって、あるいはそれを理論的にあとづける考え方としては、さっき植村さんが言われたようなカルドア的な賃金主導型成長モデルというのが形成される。あるいは 30 年代的にいいますと、購買力説みたいなことがそういう理論になるわけですが、そういうようなものが社会の中のいろいろなグループのいろいろな運動の結果として、そのころの時代の制度というのはできているだろうし、労使の協調、妥協体制にしても両方で経営者と資本家の、そういう意味ではゲーム論的な世界なのかもしれないのですが、相互の対抗関係の中で一定のところに落ち着いて、それがたまたまうまくいくと、それが安定して機能していくというところがあって、そういうさまざまな試行錯誤を働かせていくという中で一定の秩序を形成していくというところがあって、その話が清水さんの内

部観測につながるかどうかわからないのですが、私たちは社会の中の内部にいて同時に外から眺めている。どういうふうに制度をつくったらいいかとか、どういうふうに設計したらいいかとかいうことだけではない面が常にあると思うんです。そういう形で、制度の形成という問題はとらえられるのではないかと。それがうまくいく場合とうまくいかない場合があります。

それから、もう1つの観点についてはいいですか、そこまで。

【清水】一応、今の話で。

【柴田】そうですね。では、あとで両方の問題についてまた発言の機会がありましたら、改めて話したいと思います。

【清水】柴田さんのお話は、例えば資本主義というシステムがうまくワークするためには、経済的な調整装置の主要なものである「市場」だけではなくて、非経済的な装置が必要であるという話だったと思うのですが、そうするとこのプロジェクトの名前が別に「《市場》経済の神話とその変革」ではなくて、「《資本主義》経済の神話とその変革」でも構わないということになるのでしょうか、柴田さんにとって。なぜ、ここに「市場」というのを持ってくる意味があるのでしょうか。

【柴田】ですから、実は資本主義経済というものを、「神話」としては市場経済だというようなことでいわれるという意味では、この言い方でよろしいのではないかと。

【清水】そういう意味ですか。わかりました。同じように、できれば1回目は「市場」と資本主義、あるいは、「市場」と諸制度という形でも結構ですけれども、参加者の方々の、資本主義における市場観みたいなのを簡潔に語っていただければ幸いなのですが、誰かいかがでしょうか。浅田さんに非線形動学の立場から「市場」をどう考えられているのか聞きたいのですが。強引なのですが

よろしくをお願いします。

【浅田】非線形動学というのはひとつの分析の手法ですから、市場ということは特に非線形動学と関係があるわけではないんですが、市場システムにも適応可能です。だから、ちょっと話がそれてしまうかもしれませんが、動学的な分析方法です。それは、皆さんが御承知のように本来は物理や工学、化学と呼ばれるもの、あるいは数学モデル分析手法としてある。それを物理や工学のテーマだけではなくて、人間社会のある一側面についても利用可能だと。ですから、もちろん経済学にも利用可能だと。それはもういわゆる正統派であろうと反正統派であろうと、数学的なアプローチを取る限り、結局はマルクス経済学であれ、新古典派であれ、ケインズ派であれ、数学的アプローチを取る人たちは、結局は物理や工学や数学からの分析手法を何らかの形で取り入れていて、動学というのもそのうちの1つです。

非線形というのは関数が曲がっているといっているだけですから、自然界が線形であるということとはあり得ないとだれでもわかっているわけですから、真っ直ぐなものというのは人間がつくったものだけです。ビルの壁とか四角い箱というのは自然界にはありません。そういう意味で、自然界というのはもともと非線形にできている、それを正確に関数形でとらえようと思ったら非線形になるわけですが、それにしても資本主義社会であれ市場経済であれ、非線形の性質をもっている。ところが非線形というのは非常に複雑な動きをします。単純な人間の心ですね。真っ直ぐな人は線形。おれは曲がったことが嫌いだというのは、線形の頭脳だという方が正しいかもしれない。つまり軌跡を出すと角度がねじ曲がっていると非常に複雑な行動をとるわけですが。ねじ曲がっていない人は非常に単純な行動をとりますから予測しやすいんですけども、ちょっとずれていますね。つまり、

ねじ曲がっているものは非常に複雑な動きをする。自然界であれ、人間社会であれ、ねじ曲がっていることによる複雑性に通じているわけです。それを少なくとも数学的にとらえようとする、非線形動学ということになるわけです。市場経済だけではありませんが、市場経済のプラスの動きを分析する一定の役割はそれで可能でしょう。

それとは別として市場経済の分析と非線形動学とは論理的に一応別なわけです。結局、現在、資本主義ということと市場主義ということは、ほとんど同義語に使われていると思うんです。主観的には自称資本主義者はほとんどいないと思うのですけれども、自覚的な市場主義者はいっぱいいると思います。だけど、資本主義イコール市場主義ということだと思っただけです。そもそも資本主義という言葉が使われなくなってきました。それは、社会主義という言葉が使われなくなってきたことと歩調をそろえてといってもいいかもしれませんが、さらに社会主義というものが資本主義に対する対抗勢力というふう意識された時代には、それとの対比で資本主義という言葉は使われたけれども、社会主義が自己崩壊してしまいましたから、恐らく資本主義というものを自覚する必要がなくなって、結局残ったのは市場主義だと思うんです。市場というのは恐らく自覚的な意識によってつくられたものではありませんから、実はそこに強みがあるんだと思うんです。ですから、清水さんの言われた内部観測云々の理論、私は内部観測というのは正確には理解していませんけれども、実は読んでもさっぱりわからないのですが、ただ勝手なイメージで推論すると、恐らくいわんとしているところは、例えばケインズ主義ですとか、伝統的な社会主義というのは人間社会、あるいは経済を外から眺めて、しかもいろいろ偉い人がいじくって、望む方向に本当はできるものだというイメージがどうもあるわけです。そういうイ

メージで市場社会がとらえていく、伝統的な社会主義にしろ、あるいは正統派のケインジアンにしろです。実は、そのハイエクなどの人々を、いわゆる市場主義者といわれているのは、その点についてケインズを批判しているわけです。つまり私たちが住んでいる市場社会——資本主義といってもいいのですが——というのは、一部のエリートがいじって自分たちの方向に動かせるようなものではない、もっと複雑なものだ、実はどっちみち動かさないものだったら下手にいじらない方がいいというのは、ネガティブな意味での、つまり市場がいいから選ぶというのではなくて、市場以外に方法がないから選ぶというのは、恐らく否定的な意味での、しかし残っているのはこれしかないという意味で、ハイエクなどはいっているのですけれども、ですから市場というのは非常に不完全でいろいろな問題を起すけれども、ほかに何か方法があるかというとなないので、結局それを補完するためにさまざまな不安定性や不公正を減ずる手段を講ずるしかない、結局は基本的には市場で解決するしかないというのが、現在私たちが到達したところではないかと思っただけです。

【清水】たぶん今のお話は、1920年代の社会主義計算論争以来あった「市場か計画か」という話だと思います。この論争が示したのは、理論的、形式的にはどちらでもワークするよ、ということでした。「市場」であっても（一般均衡論的市場ですけれども）「計画」であっても、モデルとしてはワークするよと。しかし、実際に残ったのは資本主義だけであることを考慮して、「市場」の効率性とはどこにあるのか、が新たな問題となっています。最近使われている言葉でいうと、多中心問題とか、NP問題などに関しては、上から解くことはスーパー・コンピュータでもできない。したがって、そのような問題は、その場その場で、いわば場当たりに解いていくのがある意味で一

番効率的だといわざるを得ない。だから「市場」を分権的な意思決定を可能にする機関だと見れば、これを擁護しつつも特権化するのではなくて、「市場」から生まれる不都合は「市場」外の何かほかの制度を補完的に対処するべきであろうというのが、浅田さんの意見かと思います。ということは、このプロジェクトの「市場経済の神話とその変革」という辺りの「市場」も、浅田さんはそういうふうにとらえていると理解してよろしいでしょうか。

では、さきほど植村さんに剰余アプローチの長所、短所を述べていただきました。特に分配に関して、剰余アプローチというのは、マクロの分配に関しては不均等配分などを語るができるけれども、ミクロでは非常に弱いというふうなお話をなさったと思います。この辺りとできれば絡めていただいて、植村さんにおける資本主義と「市場」という問題を手短かに語っていただければと思います。

【植村】「剰余アプローチ」という問題をどこまで十分に論じられるか、自信がないのですが、それを念頭に置きながら話を進めます。まず、資本主義と市場という問題で言いますと、重要な点は市場と資本主義をまずは分けて概念化し、そのうえでこの両者をどう統一的につかまえるかということであろうと思います。もちろん、これをやり出すだけで様々な政治経済学の学派が意見を異にするのははっきりしていて大変難しいと思いますが、しかしこれはたとえ意見が分かれたとしてもきちんとやるべきだろうと思います。私自身は市場と資本主義というのは概念的に異なったものだと思っています。さきほど浅田さんがおっしゃったシステムの非線形な挙動ですとか、あるいは資本主義の不安定性というのは、かなりの部分、市場そのものよりも資本主義に、つまり企業の行動に原因があると思います。企業組織が資本主義的

に編成されていることによる要素が大きいと思っています。これはポスト・ケインジアンも強調していることですが、投資行動とかあるいは金融資産の取引といったような側面は、単に市場というよりはやはり資本の運動、企業の行動の一環として生じているのだらうと思います。まず、この点が最初に強調したいことなのですが、たしかプロジェクトの最初の研究会で、私が「なぜ資本主義ではなく市場なのか」と、佐藤さんに質問したことがありました。そのときのお答えとしては、「資本主義」という政策的主張はなく、現在、政策的主張を行う人々は「市場主義」と語るという問題があると。それとともに、佐藤さんのお考えでは、今後人類は市場とは相当長い間つきあっていかざるを得ないけれども、同時に、非資本主義的要素を強く持った市場経済というのもまた考えられるのだ、あるいは考えたいのだということもおっしゃっていたように記憶しています。

それから、資本主義と制度という問題ですが、先ほど柴田さんがおっしゃったように、私も資本主義は、さまざまな制度に支えられて運動していると考えています。そして、歴史的には構造的に安定した時期と不安定な時期があつて、それを繰り返しつつ諸制度が内生的に進化していく、このような点については私もおおむね同じような見解を持っています。そのときに先ほどの浅田さんの御説明ともかかわるのですが、おそらくそこには柴田さんがおっしゃっていた「信頼」とか「システムの安定性への信頼」、あるいは「期待の安定的な形成」、総じてある種のコンベンションとか慣習とかいったものが重要性を持っている。そういうものがあるからこそ資本主義が日々安定的に再生産されるといったことになるのだらうと思います。そのうえで私どもが「資本主義」というものをどのように考えているか、ご説明申し上げたいと思います。

『社会経済システムの制度分析』の中では、資本主義というのを基本的には市場システム、特に市場システムでも貨幣・金融システムとそれから「賃労働関係」との二層構造で成り立っているものと考えているわけです。「賃労働関係 (rapport salarial)」とは、たんには雇用システムだけではなく、生活様式や社会福祉制度など様々な諸領域と接合したもので、レギュレーション理論で使われている概念です。ここで、重要なのは、諸制度のかかわり方がこの2つのサブシステムでは異なるということがあります。まず市場システムは、その基礎に貨幣制度なり取引に関する慣行といったものがあって初めて成立するものだろうと思っています。市場は様々な制度的な編成をその内に持ったものとして成立していると。その上で、その市場の中で中心的に運動しているものは、もちろん「資本」です。これについては、マルクスの基本的な定義が今でも重要ではないかと思っていますが、貨幣の自己増殖する循環的運動です。そういう資本循環が様々な制度を中に含みつつ運動している。これが一方にあります。もう一方には、労働者、勤労者が生活を抱えつつ世代を再生産させていくシステムがあって、資本主義とはそれが近代の企業組織によって統合されているシステムだと考えています。したがって、ミクロ・レベルでは、企業組織が資本主義の中心にあり、現代の制度的な問題でいえば、先ほど問題になったコーポレート・ガバナンスのような、企業に関するさまざまな利害関係者なり所有者が、その意思決定にどのように関わっているかということが中心の問題になるのだろうと思っています。このあたりは、芳賀さんとかなり近いのかもしれませんが、企業組織を中軸にすえて制度分析を行っていくということになります。同時にマクロ・レベルでは、貨幣・金融システムと賃労働関係とが、それぞれ独自のマクロ的な規定力を持っていると理解して

います。一方で貨幣・金融的な、したがってホスト・ケインジアンのような不安定なマネタリーな動きがあるとともに、それに対して必ずしも従属的とはいえない独自の領域としての賃労働関係の反作用がある。さきほど、柴田さんが対抗運動という言い方をされましたけれども、そこから対抗的な圧力を常に生み出していくような領域として賃労働関係が存在しています。こういった力が同時に働きつつ資本蓄積が行われているのが、資本主義だろうと思っています。

「剰余アプローチ」について一言だけ申しますと、「剰余アプローチ」の一番重要な点は、資本主義を再生産されるシステムだと考えることだと思います。そのうえで、この再生産のシステムの中で比較的リジッドに再生産されている部分とかなり弾力性のある部分とがあって、その弾力性のある部分の方が、通常、「剰余」と呼ばれるのだと思います。そして、この「剰余」部分の大きさやその分配は、社会的ないし政治的な、あるいは労使関係的な力によって変化させうるものと考えられるのです。この点にかかわって、私はJ. ロビンソンの「インフレーション・バリア (inflation barrier)」という考えを重視しています。それは、「剰余」の分配を争う両領域、すなわち貨幣・金融的な領域と賃労働関係の領域の規定力が一番先鋭的に対立する状態であると理解できるからです。すなわち、「インフレーション・バリア」の状態においては、高蓄積が進むにつれて利潤率が上昇し、実質賃金率は下がるけれども、実質賃金率のこの低下を今度は再生産システムとしての賃労働関係が許容し得ず、インフレーションが発生するわけです。もちろん、賃金格差などのミクロの分配や資産格差を含む個人間分配の問題は、まだこの先に残っています。

【清水】今、「社会経済システムの制度分析」の立場から「市場」を見る植村さんの場合、まず、

賃労働関係と「市場」という2層構造の話が出ましたが、そこに入る前にこのプロジェクトの表題にもう一度立ち戻ってみたいと思います。この表題においては、基本的に「市場」とキャピタリズム＝資本主義は一応違うものだと分けて考える。それをどう統一するののかによって、恐らく個人々の参加者の経済学、あるいは経済に対する考え方がそこで出てくるだろうと思います。共通の認識としては、「市場」と資本主義というものは一応区別して考えるべきものだということがあるのでしょ。そこで、先ほど記述的分析とモデル分析の結びつきが必要である、その後に資本主義経済分析の際には、やはり基礎的な原理を経済学は見つけないといけない、ホスト・モダニズムのように多様性の海に旅立って行ってはいけないというふうに、野口さんが言われました。僕の個人的な意見としては、できれば「悪いポスト・モダニズムのように」と言ってほしかった気がするのですが、これはさておいて、資本主義経済の基礎的な原理、いわば多様性を統一するようなひとつの同一性というか「構造」を見つける場合に、「市場」というのがどういう位置づけを持つのかについて、野口さんに語っていただきたいと思います。

【野口】恐らく、変化や差異が様々な生じうる場面において市場の論理が一様性をもって自己完結すると考えてしまうと、それは多様性の理解とぶつかるわけです。市場メカニズムが多様なものを受け入れうるモメントを含んでいるというふうに、歴史的にだけでなく、原理的あるいは論理的にも捉えるべきだと、私は考えています。ただその場合、市場が平等主義的にコントロールできるものなのかどうかということについては、若干の疑問を持っています。つまり市場メカニズムそのものは、本当に平等主義的コントロールが可能なものなのでしょうか。この研究会のテーマにもなっております「〈平等主義的〉市場の可能性」という

ことについては、したがって、私自身は若干留保したい気がしているわけです。しかし、だからといって資本主義経済の市場メカニズムが、いわゆる市場の論理によって一元的に支配されると考えるのも一面的であることは、言うまでもありません。マル経であれ近経であれ、自己利益の最大化をどのように定式化するかは別として、経済主体の自己利益を最大化するという運動だけで市場システムは自己完結すると考える傾向が、これまではあったように思われます。その点では恐らく、従来のマル経も近経もそんなに変わりがないわけです。しかし、市場メカニズムが様々な不安定や不公正あるいは歪みを含みながら、にもかかわらず、それでも市場があるかたちを保ってワークするのはなぜであるのかを考えなければなりません。市場が不安定や不公正を当然にともないながらワークするということがあるとすれば、そこに何らかの形での制度的補完が必要とされるということになるのではないのでしょうか。それに関しては、私に異論はないのです。

ただ、一般的に信頼とか慣習という言葉でもって、そここのところを、つまり制度的補完という問題をくぐり抜けるのは、私は反対なのです。信頼ということが、最近盛んに説かれるのだけれども、そんなふうに抽象的、一般的な信頼の問題にしてしまうと、非常に平板な市場の理解になってしまうのではないかと気になるのです。やはり資本主義の発展段階で信頼のあり方は違うわけです。コンベンションにしても、実際に時代状況が異なれば違ってくるわけです。どうしてそのように質の異なる信頼関係が求められることになるのかということまでをも見通しうるような市場メカニズムの変容の理解が、つまり、具体的な信頼関係を形作るシステムの転換可能性をも見通した理論が、難しいことではありますが、経済学において、いま強く求められているのではないかと思います。

では、そのような制度的変化や差異の可能性を含んだ理論とは、どのような理論なのでしょう。私が考えているのは、市場が置かれている条件が変わることによって市場の組織や働きに差異が生じうるということを示すような理論、あるいはまた、資本主義の運動の枠組みを構成する条件の変化や差異が運動の方向をも変えうることを示すような理論、そういう理論です。市場と資本主義を成り立たせる条件をすべて拾い出すのは困難ですが、現実的にみて重要な条件をいくつか入れることによって、変化や差異の可能性をいくつか論理的に引き出すという理論の立て方がありうると私は考えます。そのようなことをすると仮定がアドホック(ad hoc)になり、理論の一般性が損なわれるという批判が当然に予想されます。しかし、開き直った言い方をすれば、理論の前提は皆、ある意味ではアドホックなのです。極端に言えば、仮定のアドホック性を完全になくすというのは不可能であると私は思っているわけで、アドホック性を認めたくて、いかに現実的に意味のあるアドホック性を前提するのかということが、きわめて重要であると思います。新古典派のミクロ理論が前提する仮定でさえ、そのような意味においては、はっきりいってアドホックなのです。したがって、理論の一般性とはいっても、そこには常に一定の留保があるわけですし、現実的に意味のあるいくつかの仮定のもとでいくつかの異なる帰結が生ずるという命題が一般に成り立つというかぎりでの、限定付きの一般性にすぎません。だが、いくつかの意味あるアドホックな条件のもとで、市場の運動にいくつかの分岐を生み出すメカニズムが働くことを、パターン化し理論的に示せる可能性があると思うのです。

例えば、資本主義の労使関係の一般理論をどのように展開できるのかという問題に即して考えてみましょう。だがそれは、婦人労働や児童労働に

強く依存しつつ市場メカニズムが非常に強く働いた19世紀の古典的な世界と、組織労働者の形成を基礎に資本主義の組織化が進んだ時代とでは、労使関係のあり方は当然に異なるわけです。さらには、組織化から反転してデ・レギュレーションが進行する今日のグローバリゼーションのもとでは、当然に労使関係にも組織化の進んだ時代とは異なる変化が生じうるわけです。そうして資本主義の労使関係の全歴史を踏まえたうえで、例えば、労使関係の分岐の可能性について理論的に一般化する命題を立てることは、不可能ではありません。企業の境界が絶えず揺れ動く世界では、企業の労働過程で必要とされる熟練のソースを外部に求めやすい構造が生まれ、したがって企業内的に仕切られた熟練形成のメカニズムはワークしにくいということが理論的に言えそうです。したがって、また逆に、企業の境界が固定的でその仕切りが堅固な世界では、企業内的な熟練とそれを支える労働慣行の安定性が確保されやすいということが、理論的に証明可能なように思われます。これは、企業間関係を規定する条件の変化が、労使関係の分岐をもたらすことを示す、労使関係の一般理論とみなすことができるのではないのでしょうか。そのように資本主義の原理を、市場システムあるいは資本主義システムの分岐のメカニズムを示すものとして捉え直すと、かなりおもしろい資本主義の基礎理論ができあがる可能性があるわけです。ですから、市場や資本主義の多様性の問題は、そのように経済理論的に解かれる努力がなされるべきであって、抽象的に、信頼とか慣習とかの言辭で、この問題をすり抜けるのは、はっきり言って経済学の行き方ではないと思います。

【清水】今の話は仮定のアドホック性というのは絶対に避けられない。野口さんが要するに「アドホック」と自分で言われながら、仮定がある程度

適切であるという根拠は、さっき言った記述的分析によるのですか。

【野口】時代が持っているひとつの共通性というか、一般性というものをどう捉えるのか、そこに理論の根拠があると思います。共通性は何かという点に関しては、もちろん議論が分かれるかもしれませんが、その可能性は十分に認めるのだけれども、共通性を絞り込む努力を同時代人はつねに怠るべきではないということです。

【清水】これであと笠松さんに聞くと、一応皆さんの市場観がわかるということになります。僕は、笠松さんにポスト・ケインジアンあるいはスラッフイアンとして語ってくれと強制するわけではないのですが、一応、生産価格論だと、「市場」というのが一般均衡論で見られるような需要と供給を調整するものではない。そういう重要性は「市場」に入っていないですよ。均衡価格論と生産価格論の差異を明確にする教育的な意味もかねて、スラッフイアンならば「市場」というのをどういうふうに資本主義の中に位置付けるのかということと、スラッフイアンとアイデンティファイしない笠松さん自身はどう考えるかということをお聞きしたいのですが、ここからはずれても全然構わないです。

【笠松】今回の順番で一番最初に清水さんがおっしゃったように、このプロジェクトのテーマが、「資本主義経済の神話」と考えるか、「市場経済の神話」と考えるかという、そんな話から述べたいのですが、恐らくこれはもちろんいろいろな配慮があってされているのかもしれませんが、やはりポイントの1つとしては、「神話」という方に私は重点があるのではないかと。さっき浅田さんも言いましたけれども、最近あまり資本制経済とか資本主義経済という言葉を使わなくなった。それは確かに私も全くそのとおりだと思います。いつごろまでかはわかりませんが、ある時期まで

は社会主義経済の神話があったんです。そういうふうな考え方と照らし合わせると、恐らく今は市場経済という神話が猖獗を極めていて、それが学問的に問題があるのだというのが、たぶん佐藤さんの現実認識だと思うんです。単純に学問的な必要性から考えて資本主義経済というのはもちろん非常に意味のあることですから、そうすると例えば今日の佐藤さんのような、そういう資本世界を考える場合だったら、資本とは何かとか、資本の形式とは何かというような重要な問題を論じなければならぬということになると思うのですが、あくまでも神話を論じなければならぬという場合には、必ずしもそういうふうに議論をつめなくてもいいのではないかということだと思うんです。ですから、なぜそういう神話が今、語られるようになったか、あるいはそこにおいてなぜ市場経済というものが考えられているかというふうに問題を捉えると、その意味でやはりここは資本主義経済の神話ということではなくて市場経済の神話だと考えます。違うことは違うと思いますが、その意味ではやはりむしろ資本主義についてこのプロジェクトで論ずるよりは、市場経済の神話について論じておいて方がプロジェクトとしては実のある成果が出るかと思います。ですから、例えば10年くらい経つと誰も市場経済などという言葉を使わなくなるかもしれませんから、ある意味では今だけかもしれないわけです。そうすると、学問的に見たらそんな短期的なことしか話されないような問題を論ずるのはどうかということもあるわけですが、そういう神話が語られていたということは恐らく事実だと思いますから、それについての学問的な分析というのは意味があることではないかだと思います。それが、資本主義と市場との私なりの今の時点での考えです。

あと市場の話が出てきていて、その中でどういうふうに考えたらいいかということですが、ち

よつと……。教育的な意味からいうと、僕らが教室で教える場合には、ああいうプラスアルファの体験下の中で市場というのはどういうふうに見えるかということ、均等利潤率とほとんど同義だということになると思うんです。そのほかにも、どういうことが理論的に出てくるかということ、ちょっと。ほとんどさっき野口さんも言われまし

たけれども、均等利潤率というのを、もちろん浅田さんなんかはもっと数学的にやるわけだけでも、普通はあれはほぼ仮定に近いんです。もし、あれが成立しなくなってしまうと、というような形でとばしてもいいかと、そうするとどうなるかちょっとわからないのですが。それくらいです。

● 資本主義と〈公正〉・〈平等〉

【佐藤】今、市場観をめぐって議論をしてもらいました。清水さんは割とプロジェクトのテーマに引き付けて議論を進めてくれました。でも、柴田さんをはじめ植村さん、浅田さんの話にもあったように、「公正、不公正の問題」について、少し議論してもらえないでしょうか。柴田さんは、資本主義の抱えている諸問題の中で、不公正、不安定性とのかかわり合いを論じていると思うし、植村さんの言い方で言うと、不公正をフェアなものにする、平等にするというときに、理論的なツールをどういうふうに僕たちが構築できるのか。この点をさらに深める必要があるのではないかと、という形の問題提起がありました。加えて、経済学である以上は、「望ましさの判断」を捨ててはいけないというような話もあったかと思います。その辺りを手がかりにしてもう少し話を広げてもらいたいと思います。いかがでしょう。

【清水】確かに佐藤さんの指摘されたとおりでと思います。そこで、プロジェクトのもう1つの柱である「平等主義的」というテーマに移りたいと思います。いわゆる資本主義経済の中で「市場」がワークしたときには、不公正が恐らく生じるというのは、直感的には「強い者勝ち」という形で理解されるかと思います。これも論者によって違

うかもしれませんが、その不公正をまずどこで判断し、例えば政策レベル・実践レベルでどういうふうにするか、「市場」の生み出す不公正を是正できるのかという論点に移っていきたいと思います。

簡単に僕から話を始めると、これはさっき浅田さんが言われた効用、福祉というタームで不公正を測るという考え方がある。それが妥当であるかどうかは別にしても、効用で福祉を測る際に、主流派（パーグソン＝サミュエルソン流の厚生経済学）では、あるきつい条件が満たされていないといけない。それはどういう条件かということ、他人のことは全然考えない、自分の中にある効用だけを比較するような人間を想定しないといけないということです。しかしながら、そういう人間を想定すると、アロー（K.J.Arrow）の場合は、だれか1人の選好順位が社会に蔓延する独裁者状態になる。セン（A.Sen）の場合は、例えば、自分が寝るときに右側に寝るのか左側に寝るのかの自由（「最低限度の自由」）をもてないことになってしまいます。だから、効用をベースにして福祉を測る場合も、他者を考慮に入れた尺度基準が必要になる。それでセンのケイバビリティ（capability）の話が出てくるわけですね。そうすると

いわば新古典派の上台に立って、その上台を批判した上で出てくる福祉の尺度、公正、不公正の定義というものがひとつあると思います。いわゆる個人主義的なアプローチから出てきた、公正、不公正の定義の一つがセンなどのケイバビリティ理論だとすると、そうではないような公正、不公正の定義があり、それをどういうふうには是正していくかという切り口があるかと思うのですが、そこら辺に関して、今、急にいわれてどうかと思うのですが、どなたか口火を切っていただけるとありがたいのですが、いかがでしょうか。

では、柴田さんのお話は、対抗運動などポランニーをかなり上台にしてあったと思います。彼などは市場経済というのは「悪魔のひき目」で、非市場的なものをひきつづけてしまう。それがもはや問題なのだという話をする。例えば、柴田さんは、レジュメの4の「市場と制度」の中で、例えば資源環境問題との共存を可能にする、「人間的自然の回復」というようなことを書かれています。こういう議論をいわば抽象的なレベルで話すのではなくて、今の資本主義経済がどういうふうに「人間的自然」をどのレベルで抑圧しているのか、どこかで尺度をつくらないと、散漫な議論になってしまうと思います（かつての社会主義経済よりいいではないかという話が出てくるかもしれないですけども）。そこら辺のことを今すぐに明確にしろというわけではないので、どういう考えをお持ちなのかをお聞きしたいのですが。

【柴田】うまく続けられるかわからないのですが、恐らく人間的自然の破壊というのは、いろいろなレベルで問題になっていると思うのです。例えばアメリカの食糧メジャーによって日本人の食生活が破壊されてしまったというようなことがあり、菜漬けの生活にされてしまったという問題もあると思いますし、環境問題もあると思いますし、それからもうちょっとモラルのような問題でいうと、

個人主義、利己主義の徹底化が非常に進むことによって社会のルールそのものが崩壊状態になっているというような問題もこの中に入って来ると思います。そういう意味では、人間というのは他者との共存とか、あるいは清水さんが言ったシンパシーとか、そういうようなものによって成り立っているというところが、資本主義とか市場主義によって破壊されているということがありはしないか。あるいは資源の問題でいえば、将来世代と現在世代における公正の問題とか、そういったようなこともさまざまな形で出てくるわけですし、だから社会主義の方がよかったと言うつもりは全くありませんが、そういうような側面でいろいろな問題を生み出してきているということがあると思います。

市場と資本主義の区別という問題に関連して一言だけ付け足すと、例えば具体的な話でいうと、自然食の店で買い物をする場合のことを考えてみます。この場合、市場を利用して物を買うわけですが、しかし生産者と消費者の関係はネットワークを通じてつながっていて、市場を通して売買関係の中で一定のコミュニケーションみたいなものを形成するという意味での市場というものについては、恐らくハイエクが言ったような現場の知識の利用みたいなものも含めて、そういう市場というものにはかなり可能性が持てると思います。そういうものによって例えば、店でものを買うという行為をすることによって、スーパーで大企業でつくっているものを買わないということが対抗軸の1つだろうと、個人的には思っているのですが、そういう意味で資本主義に対する《対抗軸としての市場》ということはあるだろうと思います。

公正の問題に関しては、清水さんの話とつながってくるかどうかかわからないのですが、植村さんからコメントをいただいたこととの関連でいうと、

従来の「結果の平等」みたいなことについてどう考えるかという問題と絡めていうと、やはり「結果の平等」ということを現実として、例えば福祉の問題にしてもそのことはかえって自立性を阻むというような問題を考えたときに、ある経済主体の自発性なり自分で物事を行っていく力を育てるというような自立性といえますか、そういう意味でいえば、ある種「機会の均等」みたいなことを実現していくという方向性が十分ありうると思います。その中で例えば労働者と経営者の関係で言えば明らかに交渉力の相違があるわけで、そのときに弱い部分が何らかの形でネットワークなり組織化を通じて対抗力を持ちうるのか、あるいは大企業と消費者との関係も従来は力関係でいうと消費者の方が不利であるわけですが、その消費者の運動をどうやって組織化するかということによって、大きな企業に対する対抗力を持ち得ると、そのような形で実質的な不平等みたいなものを解消していく力といえますか。その辺のところは経済学という問題を越えてもっと社会のルールは何であるべきかという倫理とか法哲学とかいった問題も含めた中で議論をする必要があって、だからこの問題は経済学だけで議論できる問題ではなくて、ここでは全く違った意見がある中でどこで共通性を持ちうるか、あるいは説得力を持ちうるかというようなところで、話は決まっていくのではないかと思います。さしあたりこの辺の問題については不勉強なのでこのくらいにしておきます。

【清水】ありがとうございました。今、柴田さんが発言された中で、自然食のお店の話などが出たときに、市場環境を通じてある意味で社会が抱えている問題を解決する契機になるときもあれば、例えば労働市場という一種の権力関係が非常に非対称な所では、それを補完するような意味で「市場」をコントロールしなければいけないのではないかという話が出てきました。できればというこ

となのですが、ひとつ今からお聞きするときに、これは無茶な質問かと思うのですが、「市場」は論理、必然的に不公正を生むのか。その不公正を不公正だと判断する基準はどこに持ってくるべきなのか。この問題についてお聞きしたいと思います。例えば、厚生経済学の流れをくみながら、つまり個人主義的な流れをくんだところだと、他者を考慮した個人主義としてセンのケイパビリティ・アプローチみたいなのが、公正、不公正の基準としてあるわけです。ただここで「個人」、「主体」という言葉を不用意に出すと、恐らく後ろにいる長原さんとかがすごく怒っていると思うので、もう少しそれを越えた、例えばマクロ的な、あるいは構造的な公正、不公正、例えばシステムが瓦解しないで再生産されるというのを公正基準に置くことができないとか。ここは非常に大ざっぱな議論になるかと思うんですが、「市場」は不公正を生むのか、不公正を測るすべがあるのかという辺りに一応絞って、お考えが聞ければと思います。野口さん、いかがですか。

【野口】公正概念には、マルクスが『資本論』第3巻の「利子生み資本」の章のところで言うことなのですが、「生産様式に照応し適応すれば公正である」という一面がつかまとうことを、否定することはできないように思います。人々の公正観は、社会関係とか社会意識に大きく依存するのです。特定の時代状況、文化的背景から離れて、一般的に公正であるとか、公正ではないとかいう議論は成り立ちにくいのではないかと、私は思っております。ある時代、ある地域において通常公正だと思われていたものが、時代と地域を異にすれば不公正になるということはしばしば起こります。とくに時代の変化による公正意識の変容あるいは破綻に対して、私たちがどのように倫理的に対応すべきかについては、かなりデリケートな問題が伏在しているように思われます。現在わが

国でも、バブル時の行動とバブル破綻後の処理をめぐって、いろいろと経営者の責任が問われていますけれども、高度成長の時代に同じようなことをやっても別に不公正だと見なされ糾弾されることはなかったという一面もあることは、不公正を倫理的に批判する際にも忘れてはならないように思うのです。私たちは不公正に対しては倫理的な批判を当然にせざるをえません。その点では、たとえば、金子勝氏の鋭い舌鋒には、私も日頃から感服しているわけなのですが、特定の倫理的な批判が社会風潮として奇妙に独り歩きするという傾向が生まれるかもしれないという点に関して、危惧するところが私にはあるのです。つまり、倫理というのは常に社会関係、社会意識、社会慣習に大きく依存しているという正しい見方、それは必ずしもマルクスものではないはずですが、恐らくアダム・スミスにおいても、人々の慣習として自生的に定着するモラルにこそ、倫理の現実的な有り様を見いだす理解があったはずですが、倫理というものは、社会意識、社会慣習のなかに定まった在り処をもつものであって、そこから宙に浮いているものではないわけです。

ですから、そうした見方を徹底していきますと、マルクスのような考え方に行き着くわけですし、公正、不公正も単純に割り切って考えて、うまく社会的にワークするのであれば、ほかの時代の目から見れば不公正に見えてもそれはそれでいいという一面は確かに否定しがたいのです。問題は、制度的な工夫、仕組みを整えながら、皆が公正だと思ような環境をつくっていくことが非常に大事なことになるわけですし、仕組みを整えることをなおざりにして、一面的に「倫理にもとる」云々ということだけで進んでゆくと、それが社会的に大きな問題を起すことにつながりはしないかと、私は懸念します。私たちのまわりには当然にも様々な人格の人間がいるわけです。そのなかに「上げ

つない」と思えることを躊躇なくできる人がいるかもしれません。また、旧来の通念や常識を大きく覆す行動が社会風潮として目立つようになることもあるかもしれません。しかしそれらに対して私たちがなすべきことは、倫理的批判では終わらないということ私たちは肝に銘じるべきでしょう。常に制度やシステムの工夫によって、倫理を逸脱すると思われる行動を、できるかぎり未然に抑止する方途を模索してゆくべきだろうと思います。それには、逸脱した行動を抑止することが、個々人の行動のインセンティブとも適合しうるような仕組みを考えていくということが、とりわけ必要とされるはずですが、それは別の言い方をすれば、個々人の行動を律するコードが、時代が求める社会通念や公正観と合致するように、制度をつくりあげていくということです。公正であるのか不公正であるのかは時代の意識によって判断されるというマルクスの正しい指摘を活かす途が、そこにあるのだと私は思います。

このような観点から公正と不公正の問題を捉えることができるとするならば、市場と不公正との関係について、こうしたことが言えるのではないかと思います。もしも市場が不公正を生むのだとすれば、常に市場は確立した公正のシステムを崩壊していき必然性を持っているということ、あるいは、市場とは常にそうした変化を必然化するシステムであるということです。市場は与えられた制度、与えられた社会意識、与えられた公正観を永続させうるものではない。市場システムは、所与の制度を突き抜ける変化のダイナミズムを絶えず発揮することによって、社会意識や公正観をも常に変転させる内的必然的をもつものだと言ってよいと思います。もちろんその変化は自動的なものでも、単に強制的なものでもないわけですが、しかし、逆に倫理的批判によって作為的にもたらされる変化であるとも必ずしも言えないわけです。

市場の不正を問う際には、このように制度や慣習をも包含する市場システムの変容の内生的性格を視野に入れておく必要があるはずです。

【清水】浅田さん、お願いします。

【浅田】野口さんに基本的に賛成なのですが、特に何が公正かということ自体が実は哲学の問題です。哲学は恐らく公正とは何かを解決すると思うんです。例えば、ジョン・ロールズの文章に「公正の原理」がありますけれども、あれだってロールズという一人の哲学者の考え方であって、すべての哲学者があれに賛成しているわけではないと思います。例えば、ある人にとって公正なシステムが、別の人にとっては不正極まりないというのが事実です。だから、いろいろな争いとか対立が起こるわけです。公正などということを経々しくいうのは実はよくないというのは、私もほとんど賛成です。というのは、実際に公正とか正義というのは、どういふふうに使われているかということ、それぞれの利害関係者が、自分にとって一番利益になり、他人にとって不利益になることを公正として主張するわけです、つまり公正の売り込み合戦です。確かに市場経済は結局、それぞれ公正を売り込んで、市場で採用されたものが公正として通るわけです。恐らく社会主義がよくなかったのは、何が公正であるか、不正であるかということ特定の判定する権限を独占した組織、あるいは個人がいると。つまり、古典的な意味での社会主義というのは、結局スターリンだのだけれどもいいですが、そういう特定の個人、あるいはその人が支配する組織が、すべてその時々恣意的な基準で判断できるわけです。その人が公正でないと考えたら断罪できるわけです。そういうことを実際にやってきたのです。だから、実は市場システムなり資本主義というのは、よりましな悪であって、公正の市場競争があるだけに独占の弊害が大きくなる、それがまた独占になってしまった

ら同じことになるんだけど、自由競争があるうちはお互いに抑制されていると。実は市場システムの利点はそういうことがあると思うんです。

それから、マルクスにしる新古典派にしる、理論を組み立てる中心概念として、協力とか仲良しとか正義とか信頼とかから理論を組み立てなかったことは正しいことです、どっちも。つまり、新古典派的な理論の組み立て方は、人間というものは利己的なもので自己の利益を追求するものであると、それがいいか悪いかはいいません。それは仮説なんです。それは恐らく事実を観察して、事実が一番近いということだと思っんです。マルクスだってそうです。そこから理論を組み立てて、例えば人々は利己的に非協力的に行動するということを前提にして、結果的に協力した方が自分の得になるから協力するという形で、協力だの協力的な行動をとるとか協調的行動などを結果的に導出するというのがいられています。結局、公正や協力は導出すべきものであって、あらかじめ前提とすべきものではないということには賛成です。

【清水】浅田さんによると、市場システムは公正を生み出すように作用するところがあるということでしたが、きっと植村さんはそうではないと考えられているのではないのでしょうか。

【植村】ちょっと難しいのですが、「公正というのは社会意識に依存する」ということはそのとおりだと思いますが、それをあまり強調すると、今度はある種の相対主義になるという危惧もあります。そこに歯止めをかけるためには、やはり資本主義の運動や実際の作用との関係をきちんとつけつつ、「公正」の問題を考えていくことが必要かと思っています。

それで、そのところをもう少し深く考えてみたいのですが、まず清水さんの最初のお話から言いますと、公正、不正というものは先ほどから皆さんがおっしゃっているように、社会的なコンテ

キストに依存するので、少し答えづらいのですが、もし格差とか不平等という問題であれば、「市場システム」はそれ自身では格差を拡大も縮小もさせないのだろうと私は考えています。少なくとも是正する能力はないと。ただ、市場システムというのは形式的には「ギブ・アンド・テイク」ですから、その限りでは市場局面での一種の公正観念を作り出しつつ、ワークしていることは間違いのないわけです。もちろん、同時に貨幣的な制約を課すことによって、経済主体を市場から排除する機能も持っています。したがって、市場は、不平等や格差を是正する能力はなく、それが資本主義的な市場であれば、格差を拡大させる力がいろいろな局面で働くのだろうと思っています。一例を挙げますと、カレツキの「ビジネスデモクラシー批判」の議論のように、資産格差があれば信用へのアクセスする可能性にも格差が生じ、それによって資産格差をさらに増幅させるような力がしばしば作用します。したがって、能力があればだれでも資産家になれるといったような世界ではないのは、はっきりしています。

その上で今日みなさんのお話をお伺いして、次のように考えることができるのではないかと考えています。一つは、理論の問題、もう一つは具体的な歴史的、社会的なコンテキストでの実践という問題があり、この2つの問題について意見を申し上げます。理論面で言いますと、まず第1に、先ほど笠松さんがおっしゃったことの延長なのですが、「資本」や「利潤」という範疇についてある種の批判的な相対化が必要だと思います。「資本」というものによって「利潤」が正当化されるという資本主義のメカニズムがあるわけですが、これについてはマルクスが「三位一体的範疇批判」で批判していますし、スラフファをはじめとしたポスト・ケインジアンが「資本論争」で争ったのも、まさに「利潤」という分配範疇を

基礎づける「集計量としての資本」という概念の危うさだったわけです。この問題は、経済学の歴史の中ではやはりかなり重要な問題だろうと思います。ただ、「利潤」という形式がなくて経済システムがワークするかどうかはまた別問題で、社会主義経済における「利潤導入」の問題以来、また別の重要な論争の系譜があるわけです。したがって、問題は、「利潤」という所得力カテゴリーが「資本所有」によってのみ正当化されるべきかどうかということ、ここにはこれからも政治経済学の議論がなされる余地があるように思っています。

それから理論問題の2点目は、競争原理や能力主義という問題なのですが、ここでは先ほどから繰り返し言っているように、新古典派的な世界で常に現れる「初期賦存」というものを疑ってかかる必要があります。先ほどのアマーティア・センの「ケイパビリティ」という問題もそれに通じると思うのですけれども、「初期賦存」が所与として前提されている競争原理に対しては、もう少しタイム・スパンの長い分析が必要で、所有権に関わる諸制度や教育制度、そして資本蓄積を通じた社会階層の再生産といったより社会的な観点から問題をとらえ返す必要があるだろうと思っています。

そのことと関連するのですが、第3点目としては、個人間分配に関しては、先ほどJ. ロールズの話も出ましたが、所得分配にしろ資産分配にしろ最も低水準に置かれる人々について、それがどのような状態にあるのか、そして低水準に置かれる人々の存在によって、社会の再生産なり社会の安定性にどんな反作用や悪影響がもたらされるのか、考えていく必要があると思います。

そのうえでなのですが、これらのポイントは理論レベルのものであって、これらをそのまま具体的な歴史的、社会的なコンテキストで使うことは

容易にはできないだろうと思います。例えば、能力主義の問題でも、ある能力主義的なシステムを実施するときには、企業の中であれば従業員に透明なかたちでルールをはっきり提示しなければなりませんし、従業員が納得するような形で実行するということが必要です。それが先ほどの「公正は社会意識に依存する」という問題とかかわるのでしょうが、具体的な歴史的、社会的なコンテキストあるいは企業組織の中にすでに存在する共有された規範みたいなものに依拠して、当事者が納得のいくようなかたちで、それはコミュニケーションを通してだと思いますが、そういうかたちで実現する以外に実際のところはないだろうとも思っています。

【佐藤】議論が、大変おもしろくなってきたのですが、そろそろまとめることを考えなければなりません。あと2時間くらい議論をすれば、本当は一番いいのかもしれませんが、といっても、それは、事実上無理なので、笠松さんの発言を最後とさせていただきます。大変申し訳ないのですが、御了解ください。

【笠松】清水さんが最初に言った市場と公正との関係という問いですが、私は市場と不公正は両立するといえると思いますけれども、生むということは恐らくまだきちんと論証されていないのではないかというのが私の感想です。もう1つは、これは半分野口さんと浅田さんと同意見なのだけでも、軽々しく公正とか平等の問題を論ずるべき

ではないというのは、全くそのとおりだと思うのですが、反面逆に非常に重々しくだったら、経済学をやっている人間だったら、その問題をやはり論じないと、あまり意味がないと言い過ぎですが、だいたい存在意義が下がるのではないかというふうには思います。ですから、大事な問題だという点では非常に共通ですけれども、逆にあまりそれを自己規制してしまっただけでは反面いけないのではないかと思います。それくらいです。

【佐藤】それでは、進行役の清水さんに、まとめの一言をお願いします。

【清水】一言ですか。今日は、参加者の方々が協力的だったので進行役は楽でした。「市場経済の神話とその変革」というテーマに関しては、やはり「市場」と資本主義は違うというのを一応共通認識として、その差異をどういうふうな理論的な構成の中で論じるかによって、その論者の違いが出てくるであろう、と思われれます。ということで、この主題の方は恐らく共通のコンセンサスとして残していいだろうと。副題になっている「〈平等主義的〉市場の可能性」については、ここをどういうふうに扱っていいのか、今日の座談会では十分に話し切れなかったことなので、これが宿題として残ると思いました。これで終わりたいと思います。

【佐藤】それでは、みなさん、今日はありがとうございました。

* * *

Part II 座談会の議論に対するコメント

今回の座談会では、厳しい時間制約のなかで、市場と資本主義、平等と効率、モデル分析と記述的分析、資源配分アプローチと再生産アプローチなど、広範囲にわたるテーマが活発に論じられ、いつもの研究会と同じく大いに刺激を受けた。参加者の多くは、構成メンバーの接近法が「ばらばらではないか」といった前置きを振っていたが、今回の座談会のおもしろさは、それぞれの個性を生かして相乗効果を発揮しつつ、共有されうるテーマを発見しそれにアプローチする当プロジェクトの性格を端的に映し出しているのではないだろうか。しかも「非新古典派」といった消極的な共通性ではなく、もっと理論的に具体的な内容において。

プロジェクトは執筆計画を立案する段階に近づいており、今回の座談会は中間総括を意図して企画されている。したがって集約する方向でコメントすべきなのだろうが、今回の座談会では正面切って取り上げられなかった課題をあえて提起しておきたい。1つは「市場」に対する「計画」の問題である。もともと「市場経済」は「計画経済」に対置するための造語であろう。市場経済の神話創生のルーツは、スタグフレーションの原因を「政府の失敗」に求める先進国側の事情だけでなく、社会主義諸国における計画経済の失敗にもある。とすれば、後者についても視野に収めておくべきであろう。もう1つは、「情報の経済学」ないし新制度派経済学への評価である。例えば、プリンシパル・エイジェント論や非対称情報論を支える人間像や市場観は新古典派の根底にある合理的人間像や市場観とどこが違うのだろうか。批判すべき点、学ぶべき点はどこにあるのだろうか。

以上の2点は、座談会の主要テーマの1つであった「市場」論に関わるが、3つ目の課題は、とりわけ柴田さん、植村さんが提起した資本主義分析の見取り図を実証分析に具体化する作業である。そして実証分析とフィードバックを繰り返しながら、記述的にせよ数学的にせよ、何らかの単純で頑健なモデルを構築することが必要ではないか。この任務はもちろん僕ではなく、笠松さんをはじめとする他の多くのメンバーに委ねられているのだが。

最後に、政策論についても課題が残されている。具体的な政策提言までは及ばないまでも、そのベースとなる価値観と方向性を明らかにする〈作風〉は理論・実証の焦点を確定するためにも必要ではないか。それが、野口さん、浅田さん、清水さんらの指摘する「平等」や「公正」を具体的な文脈で探究する途でもあろう。

当プロジェクトが、総花式の問題提起に陥る危険性はないと判断した上で、時間制約のゆえに今回の座談会で取り上げられなかった課題（の一部）をあえて書いてみた。□

* * *

座談会に望まれたことはプロジェクト参加者それぞれにおける他の参加者との「距離」の測定であった。この「距離」測定は、プロジェクト参加者が固有に抱えている諸問題をそれ自体として提出するといった論点提起とは異なる次元をプロジェクト参加者それぞれの問題系を褪せさせることなくプロジェクト参加者において分有 *partage* することができるか、またそうした分有が意識されながらも、同時にそれぞれがそれぞれの問題系をそれ自体として記述することができるかといった問題をそれぞれの参加者において反省過程へ差し戻すために、プロジェクト自体が手続き的に潜り抜けなければならない課題に関わっていた。

そこで浮上した論題は、少なくとも僕自身の問題関心に引きつけて言えば、冒頭で清水が「対象」の「記述」の「方法」という論点から問題提起を開始したように、歴史的に動態するシステムとしての資本（主義）をどの様に「記述」するかといった点にある。しかしその際問題として浮上した論点の位相は、そうした「記述」がいかなる「主体」、あるいはより精確には、いかなる「構想」を携えた「記述」「主体」によってなされるのかといった、いわゆる社会「科学」とっては厄介な問題提起でもある。そしてここでの「厄介」とはある意味で非常に月並みな「厄介」であり、佐藤プロジェクトだけが直面してきた困難ではない。その意味で佐藤プロジェクトは画期的に困難な問題を正面に措こうとしていることを自負(?)せねばならないし、これまでのこの国での自称マルクス経済学者の集団性はそうした問題提起を「イデオロギー的」と称して排除してきた（もちろん、スターリン主義的「歪曲」への反省——いわゆる日本資本主義論争の「科学的」彫琢という試み——という歴史的事情を背景として）。

例えば清水は、ウォーラステインの「史的システム」（以降の自己展開）に言及しつつ、「資本主義的システムの生成と終焉は恐らく1回性のもの」とあるという点から「生成と終焉に関しては、演繹モデルによる説明・検証という方法」の困難性を指摘したうえで、しかし「資本主義がある程度安定した蓄積過程に入って、循環的な、あるいは再現されるような、現象が繰り返し起こっている」段階における「演繹的なモデル形成」を是認しているかに見える。またローソンやルービンシュタインにおける立論や「新古典派の制度生成の理論で一番、論理的に整合性がある・・・進化ゲーム論」への言及も溯及的な説明原理の導入への批判という清水の根底的な問題意識に関連づけられている（そしてこの問題意識は佐藤プロジェクトにあっても共有されるべき内実をもっている）。したがって、そうしたうえでの清水による松野孝一郎や郡司ペギオ・幸夫による「内部観測」論への肯定的言及には聞くべき多くの論点開示が存在すると同時に、またそれゆえにこそとも言うべき、新たな困難が内在している。

僕は「聞くべき多くの論点」と記した上で「新たな困難」と付け加えたが、それは清水が複雑性あるいは不確実性——この二つの最近流行の語それ自体における時間性（例えば複雑性と不確実性は過去の記述に関わっても議論されねばならないと言ったような）の問題は等閑に伏されたままだが——といった問題を論理と歴史記述との連関といった問題へ正しく結びつけながらも、しかし記述主体における価値選択（構想）といった記述に不可避に憑きまとう不確実性を依然として排除して上で、旧来の溯及

的な事後的説明原理への過程性への付加的導入によるモデルの更なる「緻密化」を目指すという、記述それ自体の実体的完結への執着が残存しているように思われる点に関わっている。それはウォーラーステインによる記述対象が安定的に循環運動をしている場合における演繹的モデルの妥当性の是認の清水における是認にも見て取ることができる。とすれば——暴力的に端折って言えば——宇野派における原理論（恐慌論）と段階論との分離・接合における困難と同様の困難を避けることが依然としてできない（野口における清水へのシンパシーが妥当なシンパシーなのかをも含めて問題が起きている）。

こうした論点に関わって言えば、柴田さらには佐藤プロジェクト全体に関わる「不安定性」の位置づけをどの様になしうるのかといった論点も同様の困難を抱えている。これについても端折った言い方しかできないが、ここでの「不安定性」とはいかなる「安定性」との対照に措かれた「不安定性」なのかについて何等の共通認識も得られていないという重大な問題が残っている。一見清水の提起とは無縁に見えるこの問題は、「安定」——これを「循環」と言い換えることで事態が明らかになるとも思われるが——が規定された上で「不安定」——「循環」の変容——を規定するといった抜きがたい〈Binarism〉、あるいはより精確には、非対称的な〈Binarism〉（理論による歴史の「整理・抑圧」！）をどの様に突破できるかという意味で、清水の問題提起が抱える困難と同様のそれを抱えていると言わねばならない。

他方柴田の問題提起は、さきに触れた「不安定性の問題」に加えて、「公正、不公正の問題——交渉力の相違——私的所有の問題」、「資源とか環境問題」、そして経済システムの如何を問わず「効率的な資源の利用〔の〕実現」といった問題を提起を行い、その上で、補完的な「制度」「ルール」「慣習」の歴史性と再構築について問い掛けている。そしてそこでの問題の核心に「制度形成」「制度生成」と「その主体」の問題が再整理されている。だがここで指摘しておかなければならない点は、制度が歴史的に変異しながらも補完する当のものである資本主義システムにおける暴力性といった今日のも継続する問題への楽観視——進化論、あるいはより精確には、制度均衡の進化論的肯定という進化論の溯及的逆転による説明、さらにはあるいは存在の合理性のヘーゲル的是認——である。僕たちは、資本（主義）の「起源」における暴力性（労働力の商品化と制度としての国家！——S S A学派の再構築の可能性）とそうした起源における暴力の隠蔽制度としての契約主義的市場システム＝市民社会（という虚妄）の生成については、程度の差はあれ、一定の諒解を共有しているものと思われる。とすれば、制度的補完とはそうした継続する暴力的「起源」の隠蔽と懐柔の歴史の変遷の意味の問い直しを意味しなければならず、またそれへの〈Counter〉がそうした隠蔽の解体を意味しなければならないこともまた諒解の枢要でなければならないように思われる。したがって柴田が言及した「リバタリアンとコミュニタリアンの論争」が、そうした隠蔽の言説的な解体ではなく、実体的な解体として効果するための文字どおりの「主体」の単位の価値的選択（構想）の問題が浮上することになるだろう。再び、とすれば、経済システムの差異を貫いた「効率的な資源の利用〔の〕実現」という柴田の問題設定はある意味で危うい問題設定ではないのか、といった問題が生ずることになる。と同時にそうした問題は、さらには、いわゆる分析的マルクス主義者におけるいわゆる〈Initial condition(s)〉の与件化、言い換えれば私的所有の問題への柴田の適切な批判的視線も脆弱なものとならないか、といった疑問が生ずる（こうした問題は、J.Elsterなどによる分析的マルクス主義の歴史「諒解」における歴史のモデル化にもっともネガティブに現れている）。問題は、恐らく、「効率的な資源の利用〔の〕実現」といった視線における「効率」概念それ

自体を解体するための視座の確立にあるように思われる。

ところで笠松の問題提起は、清水のそれに劣らず根底的であるように思われる。それは柴田における「効率性」の問題が、資本主義システムが不断に創り出す「希少性」という支配的思想に密接に関わっているからである。例によって控え目にきつい議論を提起する笠松は、それゆえに、回答を慎重にも明示化しないが、この希少性への言及は、笠松の第二の問題提起である経済学における「時間」論に密接に関わっている。そしてこの問題は当然の如く清水の問題提起にも関わっている。ここは笠松が賢明にも「経済学の議論の中にそういった2種類の部分があって両方OKだというのが、恐らく非正統派の人たちのもう1つの考え方だと思うんです」と非関与的にしか語っていないので、笠松自身の踏み込んだ理解を求めたいと思う。

次に植村の議論について言えば、清水・柴田・笠松の議論を意識的に経済学固有の「言語」へと緻密化した上で整理するといった禁欲的な——あるいはフランスにおけるレギュラシオン派が現実において果たしている政策立案的な——姿勢が貫かれているが、そうした禁欲がいわば「綻びる」点——ある意味できわめて「正統派」的な視点の再浮上（失礼！）——について言及するのが頑固に非正統派的なマルクス主義者を自認する僕の行為遂行だと思われる（J. Butler 的に言えば）。その固有な「綻び」とは、植村が最後に触れたローマーの『階級と搾取の一般理論』に放置されている「初期賦存」に抜き身で表出するノーテンキへの批判あるいは自律的に循環すると理論的に記述される資本主義の蓄積運動が利潤の領有を肯定するために非公理的で資本の運動にとっては（歴史的）異物・遺制であり続ける国家的領域化に寛恕を与える他ないという歴史性の法的表現に他ならない私有制度への批判に関わっている。僕の疑問は「私有という制度は制度の経済学的解釈とそれにもとづく批判によってレギュレート可能か？」あるいは「レギュレート可能とすれば、そこでのレギュレートとは一体何を指しているのか？——それは「効率的」な稀少資源の緩和された条件での再分配か？——それはセイフティネットなる傲慢な政策とどこが異なるのか？」などといった一連の社会民主主義あるいは「第三の道」論への批判に関わっている（相変わらず「救済される」僕たち！）。そうした観点から言えば、固有な意味でもっとも興味深い発言は浅田から提出された「クール」な経済学理解である。非常に率直に言えば、浅田がそうしたクールな立場を徹底して提出することが、皮肉にも逆説的に、いわゆるマルクス派の「構想」の「駄目さ加減」を明示するように思われる。

ところで野口の中道・レンジ（middle-range）論について言えることは、それ自体として聞かなければならない論点が多いにせよ（もし野口が宇野派の救済をその学知的目的とするといったケチな根性から解放されているとすれば）、ここでの僕の問題関心から言えば、そうした知識としての中道・レンジ論における修辞学・説得の暴力性の問題である（資本の解釈学は何によって担保されているのか？——それは労働の存在論ではないのか？）。恐らく僕はそうした点についてプロジェクトに寄与できるものと考えている。□

* * *

[#1]ここでは、座談会に対する直接的なコメントというよりも、座談会から示唆され喚起された私の感想を述べたいと思います。

神話の主要な役割は、何らかの認識対象に対する論理的説明のモデルを提供することです。「市場経済の神話」とは、経済なるものが市場によってうまくいくという論理的説明を行うことに他なりません。これに対して、市場が必ずしもうまくいくものではないと正面から反論していくことは、確かに必要なことです。ですが、もう一つのありうべき神話の役割は、認識対象の遮蔽幕の役割を果たすことです。ですから、神話を読解するには、何がどのように語られているかを通して、何がどのように語られていないかを読解することが必要です。さらに神話を批判するためには、語られたことに対して批判すると共に、語られていないことに対しても、批判の矛先を向けなければなりません。私は、「市場経済の神話」が、まさに資本の運動の遮蔽幕としての役割を果たしていると考えています。「市場経済の神話」とは、市場経済がうまくいくという論理的説明であるのみならず、資本の論理を温存させておくための防衛装置として機能しているのです。市場経済がうまくいくという主張に対して、市場経済がうまくいかないというだけでは、資本の論理から目を背けさせようとする防衛装置の機能を助長してしまう結果をも招くことになるのです。

ここで重要なことは、資本の論理を明らかにすること、あるいは、市場のエコノミーと資本のエコノミーの種差を思考することなのです。じっさい、この作業がなされない限り、市場という言葉はありとあらゆる言葉と連結され、資本とは異なる認識論的付置に位置づけられることとなります。思いつくだけでも、市場と計画、市場と制度、市場と国家、市場と共同体、市場と組織、市場と社会、・・・といった語と連結し、概念上の横滑りを引き起こします。市場がこれらの対義語と無縁であったことなどありません（市場なるものは、それら対義語とのアマalgamとしてしか存在した試しはありません）から、市場という言葉をどのような認識論的付置に位置づけて分節化するかは、かなり政治的な、あるいは階級意識的・階級「無」意識的な選択であるはずで、そして、対義語のうちに接続されている市場という概念は、資本という語を抑圧した結果が変換されて生じてきたものだと思います。

資本という概念がどのように変換されて、市場とその他の対義語のうちに位置づけられてしまうのかを分析することは、とりもなおさず階級「無」意識の分析に他なりません。このような作業を行う第一歩としても、資本の論理を明らかにすることは必要な作業であるはずで、

座談会でこのような思考の萌芽があったことは喜ばしいことだと思います。この座談会をもとにそのような原理的な思考の萌芽が発展すれば、「市場経済の神話とその変革」という研究会は現代でも希有な理論的作業となると思います。

[#2` Analytical Marxism の人間だったら、座談会にどのように反応するであろうか。・・・

Analytical Marxism の最良の成果の一つは、市場と所有を概念上別のものとして考えたことにあります。階級とは、労働を他人に提供したか否かによって定義されます。つまり、階級とは市場にどのような形でアクセスするかによって定義されることとなります。また搾取とは、労働市場において提供する労働量と、財市場において取得する労働量との差額の大小によって定義されます。つまり、搾取とは、市場

にアクセスした配分結果がどのようなものであったかによって決まります。そして、それら二つは富と呼ばれる所有物の多寡に対応させることができます。これが「富・階級対応原理」、「搾取・階級対応原理」です。その結果として、搾取と階級とも対応関係を論じることができます。それが「搾取・階級対応原理」なのです。くり返しになりますが、Analytical Marxism の理論的含意は、市場へのアクセス（階級）とその結果（搾取）、そしてそれらと所有（富）とを概念上別のものであることにあるのです。市場経済を分析するためには、まず、市場と所有、あるいは市場経済と私有財産制を峻別することが重要です。

Analytical Marxism にとって、市場が安定であるか、不安定であるかは議論になったことはおそらくありません。このことは、Analytical Marxism にとって、市場が安定的であるか、不安定的であるかは、市場を市場たらしめている要件としては考えていないことを意味していると思います。ですが、市場が公正であるか不公正であるかは大いに議論があります。その基本となるのは、公正か不公正か、あるいは平等か不平等かの尺度が、主として所有の状況にあると考える点です。ここで注意すべき点は二つあります。ひとつは、ここで言う所有の状況が、単に初期賦存量の分布だけでなく、その初期賦存量にどのようにアクセスするかも含んだ広い意味で考えられていることです。そしてもう一つは、平等のメルクマールとして効用（だけ）を基準に取るのではないということです。彼らの議論が（厚生の平等ではなく）分配的正義による平等と呼ばれるのは以上の特質を含むからです。

さらに彼らの基本的な分配的正義によるアイデアがうまくいくかどうかは、私有財産制を前提としない市場経済を構想できるかどうかという点にかかっています。これが市場社会主義論の特徴です。つまり、富と呼ばれる所有物、あるいは生産的資産が何らかの意味で平等的な (egalitarian) 状態にあり、なおかつ市場経済を利用するという基本方針となっています。

座談会「市場経済の神話とその変革—(平等主義的)市場の可能性—」を読んだ Analytical Marxism の人間ならば、おそらく、市場経済と私有財産制との関係が曖昧であると判断すると思います。□

* * *

(1)市場と資本主義

資本は、経済的発展のごく初期の段階から、通時的に遍在してきたのであって、貨幣と同じくらい古い歴史をもっており、また、理論的にいっても、市場があれば、資本家的活動は不断に起動されると考えられる。しかし、資本が存在することと資本主義経済であることは同じではない。資本主義経済とは、「資本主義的生産様式が支配的に行われている社会」と定義することができる。しかし、資本主義経済の特殊歴史性は、資本が社会的再生産を編成し、維持するだけでなく、それを超える余剰を抜き出して資本の運動に取り込んでしまうところにある。資本主義経済において労働の生産力がかつてないほどの飛躍的な上昇を遂げてきたのはこのためである。また、この事態に変化がない以上、現代を市場経済と呼ぶべきではないと考える。

(2)〈平等主義的〉市場の可能性

平等主義なる言葉で表現されている内容は一義的ではないように思われるが、ここでは、資本-賃労働関係に代表されるような階級関係を揚棄した市場のことであると理解する。いわゆる市場社会主義や地域通貨の試みなどは、このような意味での〈平等主義的〉市場を企図するものと言えようが、その際、階級関係が生産手段の所有や地域間格差に限定して理解され、それを解決することによって階級性が揚棄されるとしている点に問題があるように思われる。これらの試みの背後にあるのは、市場と資本を分離した上で、市場は本来平等なものであり、資本がその平等性を妨げているといった観念である。このような前提に立てば、市場システムを温存したままで、資本の運動を廃棄ないし制限すれば、市場の平等性が確保されるということになる。

しかし、商品と貨幣とから成る市場システムはそもそも階級性を内蔵しており、資本と賃労働の階級関係も、貨幣(資本)と商品(賃労働)の非対称性という市場固有の構造に基づいている。市場には、蓄蔵貨幣と商品在庫というかたちで階級性が埋め込まれており、生産手段の独占や地域間格差に基づく不平等は、市場のもつ階級性の現われと見ることもできるのである。市場の階級性は、価値形態論が開示した商品と貨幣の非対称性という市場の基底層に由来するのであり、〈平等主義的〉市場の構築にはこの点の考慮が不可欠であると考えられる。

(3)資本主義の不安定性

不平等性のほかに、不安定性が資本主義の問題点として指摘されている。しかし、不安定性の対抗策を論じるまえに、そもそも資本主義は、構造的に不安定な経済であるか否かという問題がある。

一口に、不安定性といっても、不安定性が累積していつ放っておけば破局に至るといったタイプの議論(e.g.不均衡累積)と不安定性を孕みつつも定常状態を保つといったタイプの議論(e.g.非平衡定常系)の2つがある。例えば、柴田氏は恐らくは前者の理解に立ちつつ「資本主義というものと社会との矛盾

とか、齟齬といったものを補完するようなものとして、制度といいます、さまざまなルールとか慣習といったようなものが、恐らく形成されてきたというふうに理解しています」と述べられている。これに対し、清水氏は「不安定性というものがある、あるいは理論的に示せるということに関しては、ある程度コンセンサスが取れると思うのですが、一方実際に歴史の中で生き残ってきた資本主義というのが実はあるわけです」として、後者に近い歴史認識を示されている。さらには、自動崩壊論を否定した宇野弘蔵は、単に歴史的にではなく、理論的にいっても資本主義は相当に堅固的であると考えていた。

このように資本主義の不安定性について様々な捉え方がある以上、不安定性の概念を分明にした上で、何が不安定であり、何がその原因なのかをまず議論していく必要があると考えられる。□

* * *

座談会では、このプロジェクト名「市場経済の神話とその変革—〈平等主義的〉市場の可能性—」の主題と副題に沿って大きな二つの問題が扱われておりました。一つは市場観、特に、「市場経済」と「資本主義経済」、および、その「神話」性について。もう一つは公正の問題、特に、平等の基準と対象、および、その実現による実行可能性について。

まず、前者についてですが、基本的には笠松先生の見解に同意します。つまり、競争・自由化・自己責任を呪文の様に唱えることが市場を奉るものであり、それをあたかも神話の如く受け入れる、あるいは、受け入れさせられるような状況が一般的・学問的にあるのではないか、ということです。そして、主語として市場が用いられるほど定着しているように思われるこの神話が経済・社会の安定性や公正等を含んでおり、後者につながっていきます。これに関連して、柴田先生・植村先生他から市場と他の制度との補完関係の興味深い指摘がありました。そして、浅田先生から評価基準の設定の困難が指摘され、市場の何らかの格差是正能力に対して、したがって副題に対して、野口先生から注意深い留保がなされました。この時に、多少の混乱を感じます。それはこのプロジェクト名の主題と副題に用いられている〈市場〉という名辞は同じものを指しているかどうか、ということです。ごく簡単にまとめると次のようになるでしょう。

(1) 取引形態としての純粋な〈市場〉への機能的過信→他の諸制度による補完の必要。

(2) 〈市場〉の公正の問題→〈市場〉そのものの平等化を目指す。

(3) 〈市場〉の公正の問題→他の諸制度と共に何らかの平等化を目指す。

恐らく、座談会全体の雰囲気では、(1)・(3)での緩やかな合意はなされていたように思われます。ですが、神話に懸かる〈市場〉が一般的なもので、平等主義に懸かる〈市場〉がより学問的なもの、言い換えれば、主題が一般的・副題が学問的、であるとすれば、この差は大切であるように思われます。何故ならば、後者が分析的な概念であるのに対し、前者は、清水先生が示唆されましたように、一般の人々によりどの様に受け入れ、神話とみなされるかという、非分析的な概念であるからです。座談会の中で制度の生成論が触れられておりましたが、神話も一つの、しかもかなり強意の、信頼とみなすこともできますので、この過程は重要であろうと考えます。またそうする際に、古風な科学論の設定に過ぎないかもしれませんが、正統派経済学に対する批判を考える意義が出てくると考えます。

最後に、笠松先生の触れられた時間の問題は、恐らく、このプロジェクトと直接の関係を付け難いということもあり、座談会の中ではあまり展開されませんでした。ですが、これは野口先生の「(視野の)ミドル・レンジ」とも係わり、改めて、この問題の重要性を感じることができました。□

* * *

Part III レジユメ

● 「記述」的理論の復権？ / 清水和巳

- ・歴史的存在としての資本主義経済における「市場」の機能・役割を分析
- ・「市場は人間の意思決定なしで自律的に動くわけではない」ことを認めた場合、どのような正統性によって、「人間」、「個人」を経済分析の「主語」にもっていけるのか
- ・オルタナティブの正統性は何か

1. 「史的システム」という方法－世界システム論の含意－

⇒「システム論」：東と西、南と北などを実体視せず世界システムという関係性へ関連付けた－「近代世界システム論」の第一局面－。

近年、ウォーラーステインの世界システム論に対抗する理論が出てきている（その先鋭な例が、フランク『リオリエント』である）が、「システム論」的に（一回性の）歴史をとらえるという点では一致しているのでここではその区別をあえてしない。

①「私の確信するところでは、歴史上、資本主義的システムといえるものはたった一つしか実在してこなかった。したがって、それを叙述したり分析したりするには、何らかのモデルから演繹するような方法はとれない。」（『史的システムとしての資本主義』p.vii）

⇒「帰納的定義」の重要性。

「（自然）科学」的方法－演繹・モデル・検証－

- ・対象は繰り返し起こる現象。
- ・それらの現象に共通の同一性－構造、要素－を抽象し、記述する：理論・モデル構築。
- ・反証可能性。
- ・理論に基づいて実験を行うと現象が再現される（再現可能性）。

②最近のウォーラーステイン一連の著作－『脱＝社会科学』1993年、『アフター・リベラリズム』1997年、「科学を追い求める歴史」2000年－によると、①の理由以外に、いわゆる「演繹的理論」を懐疑する理由が挙げられている。

つまり、従来の社会科学の「演繹的理論」の多くは、「リベラリズムのイデオロギー」：「経済的なもの・政治的なもの・社会－文化的なものは、それぞれは自立した行為の領域であって、区別された論理に従い、区別されたディシプリンの対象である」に侵されている。そのために、19世紀的思考の古典的なアンチノミーを乗り越えられない。

- ・法則定立と個性記述のアンチノミー
- ・事実と価値のアンチノミー
- ・ミクロとマクロのアンチノミー

③現在、ウォーラーステイン「史的システム」の方法以外にも、モデル－演繹的な方法を懐疑する動きが出てきている。例えば、*economics & reality* (Tony Lawson)や *Economics and Language* (Ariel

Rubinstein)など。また、社会科学という分野に限らず、観察者と観察対象の切断（カルテジアン・カット）自体を乗り越えようとする「内部観測」論（松野孝一郎、郡司ベギオ幸夫）も注目に値する。「内部観測」論はシュミレーションを多く使用しながらも、その根底にあるには、分析哲学＝論理的な理論の深化がもたらす地平であるように思われる。

2. 『内部観測とは何か』（松野孝一郎、青土社、2000年）

・「内部観測」internal measurement

経験は間断のない観測から成り立つ。…経験世界に現れる個物は何であれ、他の個物との関係を持つとき、相手から受ける影響を特定できる限りにおいて、その相手を同定する。しかも、相手を同定する、とする観測はこの経験世界のうちで絶えることがない。何が何を観測しようとも、その観測は後続する、果てしのない観測を内蔵する。

⇒内部観測は決してものごとの説明原理であるのではない。内部観測は説明されるべき案件を特定し、それを記述するための手段を提供するだけであって、これを超えるものではない。

・人ごみの中を歩く

経験を進行させる運動に最も密着した記述様式は現在進行形である。現在進行形は経験と記述との直接の橋渡しを行う。例「私は人ごみの中を、他の人との衝突を避けながら歩きつつある」

- ・ これまで「人ごみの中を歩いてきた」私をさらに駆動するのは、他の人との間に起こる衝突（「不都合」）を観測し、それを回避するために行う行動。
- ・ 現在進行形はやがて現在完了形に移行することになるが、現在進行形を駆動するのは現在進行形を駆動するのは先行する現在進行の運動の結果でありながら、決して現在完了形で記録、凍結されることのない「不都合」である（「衝突している」という現在完了形の事態が生まれれば、そこで運動は終わるから）。

「内部観測」従う運動は、具体的行動が論理演繹に従わない非演繹性を示し、持続する。

⇒力学：力学に従う運動はすでに完了している。

←日食は天体力学では完了している。

←将来の大地震は現在進行形にある運動である。大地震をもたらす運動を現在完了形ではなく現在進行形に留めおき続けるのが内部観測である。

（内部観測に対して）外部観測に後続するのは観測ではない。後続するのはそこで同定され、外部化された対象の記述、外部記述となる。記述されるべき対象と記述を行うものとの分離が保証されている限り、何も問題は発生しない。しかし、説明されるべき対象の特定、同定が定かではないとすると、事態は全く異なった展開を示す。

運動を十分に「記述」するために何をすべきか？⇒外部観測からのデータ（＝外部記述）を、内部記述（内部観測からのデータ）に接合する。

⇒与えられた外部記述はありうべき内部記述が従うことになる一つの拘束条件を与える。外部記述がそのまま説明されるべき対象と化すのではなく、内部記述の内容をいっそう具体的に豊富にしていく拘束条件として働いていくことになる。

王国の経済

マクロ的には、貨幣供給量≡貨幣需要量（現在完了形）

しかし、個人にとっては、貨幣の不足（現在進行形）の永続＝破産（「不都合」）を避けるために、個人が「行為」する。その合意を察知すべきすべのない他人にとってはこの「行為」は驚きである。またこの不足解消には際限がない⇒経済系を担う個人は、解消すべき貨幣の不足を見定めることによって、新たに見定められ、解消されるべき貨幣の不足を際限なく生み出す。このことにおいて、個人の経済は確かに果てしなく後続する観測を内蔵する。

外部観測による運動の記述は正当ではあるが、不十分な記述にとどまる。外部記述は運動の記録を与える。しかし、運動の記録は運動そのものではない。∴外部記述された運動の記録はどのように運動そのものに関連するのか、という問いが生じてくる。例えば、「どうしてある金融業者がかくも金を儲けるのか」という王の問いにどう答えるのか？

求められているのは運動と運動の記録の間を埋める説明（なぜ、貨幣の保有量はかくも増大したのか？の説明）、記述ではない。記述はすでに完了してしまっている。ではいかなる説明＝理論を選ぶべきか？
不定

⇒果たして、外部記述によって運動の記述は確かに完了してしまったのか？

⇒内部記述との接合の必要性へ、

* * *

● 市場経済の神話とその変革/柴田徳太郎

1. 資本主義の抱えている諸問題

- ①不安定性（投資の不安定性、金融の不安定性）
- ②不公正（←交渉力の相違←私的所有の相違）
- ③資源・環境問題の発生（人間的自然の破壊 etc.）
- ④不効率性（食料生産、広告 etc.）

*②～④は、資本主義固有の問題とは言えない。例えば、社会主義であれば解決できるというわけではない（cf. マルクス、ポランニー）。

2. 資本主義と制度

(1)資本主義を支える、あるいは補完する諸制度（ルールと慣習）

- ①国家の役割（私的所有権の保護、財政の役割、諸規制、経済政策）
- ②通貨制度（金本位制、管理通貨制）
- ③金融制度（銀行間組織の形成、中央銀行の最後の貸し手機能、預金保険機構）
- ④労使関係（工場法、労働者の団結と団体交渉を保障する諸立法）

(2)「資本主義黄金時代」を支えた諸制度（大恐慌防止体制）

- ①IMF・ドル体制（Pax Americana←冷戦体制）
- ②規制と救済の金融システム（New Deal 型金融制度）
- ③フォード・システムと労資妥協体制
- ④大きな政府

(3)「黄金時代」を支えた諸制度の不安定化（大恐慌防止体制の行き詰まり）

- ①IMF・ドル体制の崩壊（Pax Americana の衰退、冷戦体制の終焉）
- ②規制緩和と救済の金融システムの破綻
- ③経営者優位の労使関係への移行（労働市場の流動化、所得分配の不平等化）
- ④大きな政府の行き詰まり（財政赤字の削減）

3. 日本資本主義と制度

(1)高度成長（とその後の成功）を支えた諸制度

- ①IMF・ドル体制（Pax Americana←冷戦体制）
- ②日銀依存型間接金融体制（←管理通貨制←IMF・ドル体制）
- ③日本的生産システムと労資協調体制（企業別労組）
- ④株式持ち合いシステムと企業間関係
- ⑤国家財政の景気安定化機能

(2)バブル発生の原因となった諸要因、諸制度

- ①ドル下落を防止するための介入と低金利政策による過剰流動性
- ②円高対策としての内需拡大政策
- ③金融構造の変化（自己金融化、証券化による銀行の資金過剰）
- ④労資協調と賃金抑制（賃上げでなく土地購入）
- ⑤土地投機を支えた諸制度
 - a. 株式持ち合いシステム（低配当と土地購入、株価押し上げ要因）
 - b. 税制（借金利子の損金算入、含み益は課税対象から除外）
 - c. 土地の含み益が株価を押し上げる仕組み
 - d. 株の含み益増加が銀行の信用創造能力を拡大するシステム
 - e. 日本型福祉国家の貧困（将来への不安と土地購入）

(3)90年代不況深化の諸要因

- ①資産デフレと負債デフレ
- ②93－95年の円高
- ③97年アジア通貨危機
- ④97年の財政赤字削減
- ⑤97年～金融危機（←ビックバン、早期是正措置）
- ⑥リストラと高齢化社会の到来による不安の拡大と消費抑制

4. 市場と制度

(1)新たな諸制度構築のために

- ①国際通貨の安定（通貨統合、経済統合、連邦形成の試み）
- ②再規制とセーフティ・ネットの再構築
- ③労働市場の流動化に対応して新しい対抗勢力の形成（ヨーロッパでの経営評議会形成の試み）
- ④福祉システムの形成
- ⑤資源・環境問題との共存を可能にする制度の形成（人間的自然の回復）

(2)制度形成あるいは制度生成の主体は何か？

- ①様々な組織に所属し規制される個人
- ②その個人の集合的行為に支えられる組織の行動
- ③組織の集合的行為の結果形成される制度

(3)様々な組織による安定化、公正化を求める対抗運動（労働者、消費者、生活者 etc.）

cf.リバタリアンとコミュニタリアンの論争

* * *